令和４年度

第24回
わたしの主張岩手県大会
発 表 文 集

わたしの主張岩手県大会実行委員会

目　　次

1　はじめに …… 1
2　大会日程 …… 2
3　大会風景 …… 3
4　わたしの主張発表作品 …… 5

区　分	発　表　題	学　校　名	学年	氏　名
最優秀賞	色を纏うように	田野畑村立田野畑中学校	2年	三　上　結　楽
優 秀 賞	今、ここから	盛岡市立仙北中学校	3年	三　浦　萌
	自分らしさ	一関市立東山中学校	3年	菅原アンダーソン
優 良 賞	身近に潜む「思いこみ」	盛岡市立北松園中学校	3年	小　林　理　乃
	目をそらさずに	奥州市立胆沢中学校	3年	伊　藤　千　雛
	さんたり学び舎	大船渡市立第一中学校	3年	小　西　真　央
入　賞	全ての女性が明るく生きるために	滝沢市立滝沢第二中学校	3年	泉　澤　音　寧
	命の価値	八幡平市立西根第一中学校	3年	伊　藤　華　穂
	打って反省、打たれて感謝	矢巾町立矢巾北中学校	3年	阿　部　大　雅
	感じる心を育てる	花巻市立宮野目中学校	3年	小野寺　凜
	多様性のある社会へ	北上市立上野中学校	3年	薮　﨑　千　奈
	映し鏡の新世界	一関市立磐井中学校	3年	石　川　莉々花
	見えない境界線	遠野市立遠野東中学校	3年	小水内　華　稟
	野球少女からの提言	大槌町立吉里吉里学園	9年	木　下　望　愛
	自分らしくない自分に	宮古市立第一中学校	3年	張　間　薫　梨
	心の扉を開いて	野田村立野田中学校	3年	泉　川　夢　羽
	憧れの浄法寺太鼓	二戸市立浄法寺中学校	3年	野　崎　結　夢

※　各賞受賞作品は地区順に掲載しています。

5　審査委員長講評 …… 23
6　各地区大会の開催結果 …… 24
7　審査要領 …… 28
8　第24回わたしの主張岩手県大会実施要綱 …… 29
9　わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者 …… 31
10　参考　「少年の主張全国大会～わたしの主張2022～」入賞作品 …… 32

は　じ　め　に

第 24 回わたしの主張岩手県大会は、令和 4 年 9 月 14 日（水）にいわて県民情報交流センター7 階小田島組☆ほ～るを会場に開催されました。この大会には、今年は約 3,700 名の中学生が参加し、県大会には、地区大会で選ばれた代表 17 名が出場しました。なお、今大会は、新型コロナウイルス感染拡大の観点から、無聴衆で開催いたしました。

この大会は、次代を担う中学生に、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、日常生活の中で感じたことや考えたことを発表する場を提供することにより、自らの主張を正しく伝え理解してもらう力を身に付けるとともに、地域社会との関わりについて考え、行動する契機とするほか、多くの県民に中学生の考えや行動への理解を深めていただくことを通じて、子どもたちの健全育成の充実を期すことを目的として実施しているものです。

主張の内容は、日常生活、学校生活、クラブ活動など、自分の身の回りで起こる様々な体験を通して、気づいたり学んだりした「生き方」、「考え方」などを訴えるものとなっており、瑞々しい感性と溌剌とした態度で、素直で中学生らしい思いが込もった主張は、どれも感動を与える素晴らしいものばかりでした。特に本年は、アンコンシャスバイアス（無意識の偏見）、ジェンダーや多様性、ＳＤＧｓといった現代社会で注目されている事柄をテーマにする発表が目立ちました。

この発表文集から、その主張に込められたメッセージをしっかりと受け止めていただき、次代を担っていく中学生が何を感じ、考えているのかを知る契機としていただければ幸いです。

なお、本大会の最優秀賞受賞者の三上結楽さんは、令和 4 年 11 月 13 日（日）に国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会（WEB 開催）」において、努力賞を受賞しました。

おわりに、本大会を開催するにあたり、盛岡市、盛岡市教育委員会をはじめ、関係者の御協力とお力添えをいただきましたことに感謝申し上げ、巻頭のごあいさつといたします。

令和 4 年 12 月

わたしの主張岩手県大会実行委員会

第 24 回わたしの主張岩手県大会日程

日時：令和 4 年 9 月 14 日（水）12：45～16：15
会場：いわて県民情報交流センター7 階小田島組☆ほ～る
（盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7-1）

1	開会のことば	わたしの主張岩手県大会実行委員会	門脇吉彦
2	主催者あいさつ	わたしの主張岩手県大会実行委員会 (公社)岩手県防犯協会連合会会長	細江達郎
3	歓迎のことば	盛岡市子ども未来部長	高橋享孝
4	大会出場者紹介		
5	審査委員紹介		
	審査委員長	㈱岩手日報社論説委員会委員長	四戸聡
	審査委員	ＮＨＫ盛岡放送局チーフ・アナウンサー	宮島大輔
		(一社) 岩手県芸術文化協会会長	柴田和子
		ガールスカウト岩手県連盟連盟長	髙橋和恵
		岩手県中学校文化連盟会長	泉澤毅
		(公社) 岩手県青少年育成県民会議副会長	五十嵐のぶ代
		(公社) 岩手県防犯協会連合会専務理事	村上操
6	主張発表		
7	成績発表並びに講評	審査委員長	四戸聡
8	表彰（賞状）	わたしの主張岩手県大会実行委員会 (公社)岩手県青少年育成県民会議会長	菅野洋樹
	（記念品授与）	㈱岩手日報社論説委員会委員長	四戸聡
9	閉会のことば	わたしの主張岩手県大会実行委員会	門脇吉彦

大　会　風　景

主催者あいさつ
岩手県防犯協会連合会　会長　細江達郎

成績発表・講評
四戸聡審査委員長

発表風景

表　彰　式

【最優秀賞】
田野畑村立田野畑中学校２年　三上結楽さん

【優秀賞】
盛岡市立仙北中学校３年　三浦　萌さん

【優秀賞】
一関市立東山中学校３年　菅原アンダーソンさん

【優良賞】
盛岡市立北松園中学校３年　小林理乃さん

【優良賞】
奥州市立胆沢中学校３年　伊藤千雛さん

【優良賞】
大船渡市立第一中学校３年　小西真央さん

第 24 回わたしの主張岩手県大会出場者　発表作品

（原文のまま掲載）

※　縦書を横書としたため、漢数字の一部を算用数字に置き換えました。

最優秀賞

色を纏うように

田野畑村立田野畑中学校　２年
三　上　結　楽（みかみ　ゆら）

「いらっしゃいませ―！！」
椅子に座った私に、美容師さんはピンクのタオルを掛けた。特に何とも思わなかったが、私の声を聞いた瞬間、驚いた様子で言った。「ごめんねぇ～男の子だったんだ。男の子ならピンクの色は嫌だよね～」
……何で？　何で男の子ならピンクの色は嫌なんだ？
何で【男の子】は、ピンクを身に着けてはいけないのだろう。ピンクが好きな男の子だって当たり前にいるだろ。
何で色で【男】【女】をわける必要があるんだ？？全員同じ色のタオルじゃ、何がダメなんだ？？
たった一枚のタオルの出来事に、私はずっと悩まされていた。

「(笑笑) お前、男のくせに、こういうキャラクター好きなのかよ　(笑笑)」
思い返してみると、私たちも知らず知らずのうちに、こんな風に【男】【女】の括りで物事を判断していないだろうか。
好きなものが好きで、何が悪いんだ。

モヤモヤは、募るばかりだった。

そんな時、「アンコンシャスバイアス」という言葉に出会った。アンコンシャスバイアスには、無意識の偏見・無意識の思い込みという意味がある。無意識の偏見・無意識の思い込みが起こる根底には、先入観や固定概念、「この人が言うのであれば、間違いない」と無意識に信じる心理、人数が多い方が正しいと思う集団心理が関係している。
美容師さんの行動をふり返ると、美容師さんに悪意がないことは、わかる。きっと【無意識の先入観】が起こり、あのような判断をしたのだろう。
そう言えば、私も
「えっ！？トラックの運転手は、男の人の仕事じゃないの！？」
「幼稚園の先生になれるのは、女の人だけでしょ？」
と、小さい頃は思っていた。

そうか！私たち人間は、無意識のうちに偏見を持ちやすい生き物なんだ！
だったら、“無意識の偏見”に打ち勝てる価値観を、私たちは持たなければ！

今、日本は多種多様な生き方を認め合おうという動きがある。だが、ふとした時に、自分の生き方の基準や価値観で【らしさ】を決めつけてしまう部分もあると思う。美容師さんのように、声が低いと【男の子】、声が高いと【女の子】というように判断する時は、皆さんにもないだろうか。
何気なく言った一言で、
―どうせ、わかってくれない―
と、心を傷付けているかもしれない。
私たちは、心を見せ合って生活することはできない。だが、ちょっとの認め合いで
―どうせ、わかってくれない―
と、心を痛める人を救うことができるのではないだろうか。

もっと広く世の中を見てもいいのではないだろうか。
もっと自由に人を見てもいいのではないだろうか。

私には強く望むことがあります。それは、それぞれの個性を認め合い、大切にできる、多種多様な価値観が広がっていくことです。
様々な色を自由に纏うように。
私たち一人一人の生き方も、
色彩豊かなものに……

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？
男らしく女らしくじゃなく、自分らしさを大切にしたい。自分が今までの人生でした経験だけを元に「この人はこういう人間だ」と決めつけるような人にはなりたくない。もし今偏見やらしさで苦しんでいる人がいるなら、「そんなに思い悩まなくていい。自分は自分のままでいい」と声をかけたい。一刻も早く思い込みや偏見で考える人を減らしたいと思う。

優秀賞

今、ここから

盛岡市立仙北中学校　３年
三　浦　　萌（みうら　もえ）

「もったいない。」
こんなに食べ残しを気にする日はなかった。
私はこの夏休み、ボーイスカウトの派遣で、イギリスで開催されたスコットランド国際パトロールジャンボレットという大会に参加してきました。大会には、アメリカ、スウェーデン、ナミビアなど 17 ケ国のスカウト約 1,000 人が集まり、異なる国同士 14 人で 10 日間キャンプをしました。昼はスコットランドの丘を登ったり釣りをしたり、夜はキャンプファイヤーやパーティーをし交流を深めました。
私はスコットランドのスカウトと一緒のグループでしたが、毎日、食事の度に食べ残しで大きな袋がいっぱいになりました。お昼として取ってきたパンに全く口をつけず、そのまま捨てている姿も目に入り、びっくりしました。思わず質問しました。
「Excuse me, Why do you eat leftover?」
彼の答えはこうでした。
「満腹になったからだよ。自分のペースでいいから、無理して食べる必要はないよ。」
「食いモンを粗末にすんじゃねェよ。」
ワンピースのサンジなら、すぐこう言うだろう。ワンピース好きの私の父も
「サンジも言っているだろう。食べ物は絶対に無駄にするな。」
食べ物を捨てるのは「もったいないことだ」そう意識して生活してきた私にとって、彼らの行動は不思議で、恐怖すら覚えたのです。
中学校１年生の総合的学習で、SDGs 目標２「飢餓をゼロに」を取り上げ、世界では飢餓に苦しむ人が８億人もいるという事実に驚愕しました。私には誰も救えないけれど、せめて、食品ロスを無くす生活をしようと決意しました。
ですから、私の日本のボーイスカウトの班では、なるべくごみを出さない、食べ残しをしない、もし料理が残ったら皆で協力して食べる、そう決めていました。しかし、そうではない考えもあることに驚きました。
もう一つ、ロンドンの観光で衝撃的な光景を目にしました。
街のいたるところにゴミがあふれている―、
一歩進めばごみ、また歩けばゴミ―。
私は学校で、ＪＲＣ委員長を務めています。地域の方々の役に立ちたい、SDGs の目標達成や環境問題の解決に貢献したいという思いから、委員会活動の一環として、毎月２日間ゴミ拾い活動を行っています。朝、いつもより早めに家を出、ゴミ拾いをしながら登校するというものです。私は自分でもゴミを拾い、その後全体のゴミを回収し、分別しています。５月６月は、ファストフード店やコンビニで買って食べた後の容器や包み紙が、７月になると、ペットボトルや空き缶が目につきました。捨てられているのは建物の陰や草むらの中で、「拾うのも一苦労だった」という声が聞かれました。毎回、４５リットルのゴミ袋からあふれかえるほどのゴミが出て自分たちの活動が無駄ではないかと、くじけそうになることもありました。
しかし、ロンドンの街の様子をみて、私は決意を新たにしました。
日本人は「ゴミを隠すように捨てている」、つまり、「ゴミを捨ててはいけない」ことに「気づいて」いるとわかったからです。ロンドンでは誰も「見向きも」しなかったのです。
ＪＲＣ（ジュニア・レッド・クロス）の態度目標は「気づき・考え・実行する。」まず、「気づく」ことが重要なのだとわかりました。
自分が行っているＪＲＣ活動を迷わず続けていこう！私はそう決心しました。中学生の自分が SDGs を学んで、誰かのためになることはないか「考え」、「実行する」、それが世界を動かす一歩になると信じて。
皆さんも何か「気づいている」ことはありませんか。勇気を出して、「気づき」を「行動」に移してみませんか。今、ここから―。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？
中・高生や大学生、大人に届けたいです。私は、食品ロスやごみのポイ捨ての現状を通して、私達は意識と行動だけで、この現状を変えることができるとわかりました。大人や私のような学生が「食べ物を大切にする」「町や道路のみならず、自然物の中にごみがあってはならない」と考え、行動すれば、いずれ多くの人の「あたり前」になり、マナーになると思います。その「あたり前」は幼い子へ教育として、受けつがれた時にＳＤＧｓや環境問題が解決した事になる。私達の意識と行動次第で未来は変わっていく、私はそう考えます。

優秀賞

自分らしさ

一関市立東山中学校　３年
菅　原　アンダーソン（すがわら　あんだーそん）

「どうして当たり前のことができないの。」
中学最初のテストでひどい点を取った時、母から言われた一言だ。すぐに、「当たり前って何？」と、母に言い返してやりたかったが、テストの点数を思い出すと、うまく口が開かなかった。
当たり前って何だろう、僕は考える。
僕の名前はアンダーソン。日本では珍しいネーミングだ。この名前のために、初めて会った人にすぐに名前をおぼえてもらえた。しかし一方では、英語ができる、と勘違いされることが何度もあった。相手の、「ハーフの子は英語ができて当たり前」という勝手な思い込みによって僕は、何度も傷ついた。今では、すっかり慣れたけど。
僕と同じ境遇の人はそんなにいないし、その時の気持ちを分かってくれる人は、周りに誰もいない。
だから、僕の「当り前」は他の人とは全然違うし、もちろん、考え方も違うと思う。
そんな僕は勉強ができない、というよりも、やらなくていい、必要ないものだと思っていた。小学生だった頃の僕は、勉強は日常生活で使うことだけやればいい、と勉強をしない自分を肯定するための言い訳ばかり考えていた。しかし、中学校はそんなに甘くなかった。何をやってもうまくいかない。だんだん、学校を窮屈に感じるようになった。そんなときに思い出すことがある。
９才の時、母と一緒に、父が住むカナダに行った時のことだ。肌の色も髪の色も違う人同士が暮らしていた。バスケットボールを観戦した時には、隣の人と気軽に話をして、どこまでも話が弾んだ。そんなカナダの自由な雰囲気が僕は大好きになった。
後になって知ったことだが、カナダは世界中から移民を受け入れている国だそうだ。色々な国から移民として移り住んだ人たちは、自分たちのルーツを大切にしながら、文化の異なる人たちが社会を作っている国だ。育ってきた背景も考え方も違う人たちが集まるので、自分の考えを人に伝えること、相手を理解する努力をすることが、カナダの人たちの大切にしていることだった。
また、日本とはまったく異なる価値観が存在していて驚いた。タトゥーをしている人が何人もいたのだ。日本では体に何かを彫ることは、あまりいいイメージを持たれないし、温泉では入浴を断られることもある。しかし、海外のスポーツ選手には珍しくないことだ。いいとか悪いとかでは判断できないものを感じた。
このようなことを通して僕は、国や地域、育った環境、体験などによって、人にはそれぞれの当たり前が存在するのではないかと思うようになった。
これまで僕は、他人から押し付けられる価値に窮屈さを感じていたのだろう。しかし、今は、一人一人の「当たり前」を知り、共有していきたいと思っている。そのことで、自分自身の「当たり前」が確かなものになり、「自分らしさ」になっていくのはないだろうか。そのためには、人を理解するための知識や優しさを身につけることが必要だ。
勉強が全然できなかった僕は、得意な人に教えてもらって問題が解けるようになり、だんだん授業がおもしろくなってきた。そして、知識や身につけた実力というものは、自分の可能性を広げるものではないか、と思うようになった。
中１の時、テストを見て叱った母は、狭い世界にいた僕に、広い世界を知るために勉強しなさい、ということを伝えたかったのかもしれない。
僕は将来、中学校か高校の教師になりたいと思っている。出会った子どもたちの将来を広げられる存在、夢を与えられる存在となるために、たくさん勉強して、たくさんの人と出会って、自分らしさ、アンダーソンらしさを追求していきたいと思っている。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？
これまでの自分自身を見つめ直すきっかけにしたいと思い、この主張に取り組みました。今までの自分は、いろいろな人に迷惑をかけ、あまり努力もしないで、その時の雰囲気に流されて生活してきたと思います。そんな自分でも過去を振り返り、書くことによって気持ちを整理し、未来に向けての思いを表現することができました。これから、仲間たちと互いに自分自身について語り、共に視野を広げていくきっかけになればいいと思います。

優良賞

身近に潜む「思いこみ」

盛岡市立北松園中学校　３年
小　林　理　乃（こばやし　りの）

「女の子なんだから…」「男のくせに…」

みなさんはこんなふうに思ったり、言われたりしたことはありませんか？

１月、校内の生徒代表会議で「SDGｓのジェンダー平等の観点から制服を選択制にしませんか？」という提案がありました。スカートかスラックスか自分で選び、好きな方をはけるようにしよう。私はこれを聞いたとき、「スカートをはく男子いるのかな？からかわれそう。」と思ってしまいました。

「せっかく制度が変わっても私みたいに考えてしまう人がいたら、好きな方をはけない人がでてきてしまうのではないか。そもそも、ジェンダーってなんだろう。」

そこからジェンダーについて興味がでて、インターネットや本で調べてみました。ジェンダーとは、「家事＝女性の仕事」のように社会的・文化的につくられている性別のこと。そして私は「スカートは女性がはくもの」という「思いこみ」をしてしまっているのではないかと思いました。

以前、化粧品の名前を知らなかったら「女子なのに？」と言われたことがありました。そのとき、「女子だから知っていないといけないの？私が男だったらきっと「男子なのに？」とは言われなかったのだろうな。私にはあまり興味がないだけだったのに。」と少しモヤモヤしました。これも女子は化粧をするものというちょっとした「思いこみ」だと思います。今まで興味がなくて気付かなかっただけで私たちの周りにはたくさんのちょっとした性差につながる「思いこみ」が潜んでいるのだと思いました。そして自分の「思いこみ」による言葉で誰かに嫌な思いをさせたり傷つけたりしたくないと思うようになりました。

私たちは小さい頃から、かけられた言葉やメディアなどさまざまなことから知らないうちに「女らしさ・男らしさ」などといったものが染みついています。だから自分の「思いこみ」と違う違和感を感じてしまう。それが大きな差別や偏見にもつながってしまうのではないかと思いました。

みなさんは日本が世界の男女平等ランキング何位か知っていますか？146カ国中116位です。ジェンダー平等と言うようになっても社会にでて、実力不足ではなく「性別」が理由で夢を諦めてしまう人がまだまだいます。私は自分の夢を「女性だから」などという理由で諦めたくありません。誰であっても「性別」が理由で夢を諦めて欲しくありません。もちろん女性、男性の身体的な特性はあると思います。しかし、その特性が固定化されたり、よくない風習や習慣が受けつがれたりすることによって差別や偏見、男女の格差が生じることはあってはならないと思います。

女優で男女平等を目指す活動家のエマ・ワトソンさんはこう言いました。「型にはめられず自由になろう。」例えば、制服の選択制化のように女子はスカートをはくもの。男子はスラックスをはくもの。「そういうもの」で終わらせず、あたりまえを変える。そうすることで誰かが確実に生きやすくなる。その積み重ねで社会もみんなの考え方も変わっていき誰もが生きやすい社会に少しずつ近づいていくのではないでしょうか。

だから私はもっとジェンダーに関心をもち、「それに性別は関係あるのか？」と「思いこみ」に気付く感覚を養いたい。そして自分の中の「思いこみ」をなくし、いろいろな考えや選択肢を持てるようにしていきたい。

みなさんももっとジェンダーに関心をもってみませんか？身近に潜む「思いこみ」一緒になくしていきませんか？性別関係なく「個人」を尊重し合える。そんなステキな社会を目指して。

「型にはめられず自由になろう。」

○　この作品を通して、これからどんな人生を作りあげて行きたいですか？

性別や自分の「思いこみ」にとらわれることのない人生を作り上げていきたいです。今後、もっとたくさんの人に出会い違いに驚いてしまうこともあるかもしれません。しかしその違いを素敵だと思えるよう、そして性別を理由に選択肢を狭めることのないよう、ジェンダー問題に高く関心を持ち続けていきたいです。

優良賞

目をそらさずに

奥州市立胆沢中学校　３年
伊　藤　千　雛（いとう　ちひな）

私の家は見渡す限り田んぼの自然豊かな場所にある。学校までは片道７キロ。季節ごとに姿を変える風景は美しく、空気も美味しい。

「私の住む地域はとてもきれいでいいところです！」私は胸を張ってそう言いたい。でも目に入るのは道端に捨てられたごみたち。「なぜ捨てるのだろう。」とため息が出る。目立つものから、おそらく車に乗っていれば気付かないだろう小さなものまで。自転車通学の私には、見つけようと思わなくてもそれらが目に入る。

私はごみを見つけると「拾いたい」と思う。自分が通るルートくらいはせめてきれいに保ちたい。でもそう思うのと同時に、拾ったら誰かに何か言われるのではないかという思いが私の中に沸き上がってくる。「汚いよ。」「危ないから。」「やっても意味ないのに。」誰かもわからない人のそんな声が聞こえる。だから、結局私は拾わない。拾えない。拾いたいのに、見えない何かに縛られて行動できない。それが今の私。

実は誰にも話したことがないが、私は一度、ごみ拾いをしながら下校したことがある。自転車を進めては止まり、ごみを拾う。それを繰り返し、自転車のかごに入る分だけ拾い集めた。そしていざ家に着くと、いろいろなことが気になり出した。たとえごみであっても、たばこの箱を見た親は何て言うだろうとか、最終的に自分の家のごみになるのはどうなのだろうとか。私は拾ってきたごみを密かに処分することしかできなかった。

今日、世界には様々なごみ問題がある。プラスチックごみによる海の汚染と生物たちへの影響、不法投棄、最終処分場の不足などどれも深刻だ。これらの問題は最近の出来事のように思えるが、おそらく私が生まれる前からあっただろう。そして、このままではいけないと思う人はたくさんいるはずなのに、解決の兆しは見えない。

なぜ変わらないのだろう。環境を汚染するごみ問題の解決において、捨てないことは当たり前。ごみを捨てる人が自分本位な考えや行動を改めなければ、海や道端に散乱するごみはこれからもなくならない。だから、「ポイ捨てをやめよう」「ごみを減らそう」「便利さだけを追求した生活をやめ、プラスチック製品を見直そう」そういった声や取り組みは、私たちの未来を守るために必要だ。

「じゃあ、自分はどうなの？」――道端にごみを捨てるなんてあり得ない。私はそんなことはしない。

「それで、今ごみが落ちているという目の前の事実は解決するの？そこにあるごみはなくなるの？」――なくならない。誰かが拾わなければ消えることはない。

「誰が拾うの？自分じゃないの？」――私は拾えなかった。拾いたいと思うのに、いろいろなことを気にして行動できなかった。

これだと思う。原因は。

私は、世界中のごみの責任を負うつもりなんかない。世界どころか、自分が暮らす地域のごみだって責任は負えない。でも、目の前にあるごみならなんとかできるはずだ。捨てられるごみの量より拾う量を増やせばきれいになると思ったことがある。それでもごみを拾わない私は、間違いなく、汚れた環境を放置している一人なのだ。「昨日も見たごみを今日もスルーするのか？」という罪悪感を抱きながら、それに気づかないふりをして、昨日と同じように今日を過ごそうとしている。変わらなければならないのはどこかの誰かではなく、私自身だ。

自分のなかに捨てないモラルはあるか。投げ捨てられたごみを見て心は痛むか。誰かが放置したごみに手を伸ばして拾う勇気はあるか。自分が今踏み出すべき一歩は何だろう。それを全ての人に考えてほしいと思う。

今の私に必要なこと。それは周りの反応を気にすることではなく、目の前の問題に対する自分の心の声に素直になること。

私は、もう見て見ぬふりはしたくない。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

道端にごみを捨てる人達にこの主張を届けるつもりはありません。落ちているごみを拾わない（拾えない）人達に主張を届けたいです。実際私もまだ「ごみを拾わない人」の一人ですが、自分の心にも訴えかけて行動できるようになりたいです。落ちているごみを見て何かしらの違和感を抱いた人が、見て見ぬふりをせずに、「ごみを拾う」という行動を起こすきっかけになればと思います。

優良賞

さんたり学び舎

大船渡市立第一中学校　３年
小　西　真　央（こにし　まお）

私が校長先生からお借りしている冊子がある。赤の表紙に金の文字で､｢さんたり学び舎｣とある。大船渡市立第一中学校 30 周年の記念誌だ。ひらいてみるとたくさんの白黒の写真がのっている。まさに、昭和っぽい感じ。修学旅行や部活動の集合写真など。みんな、良い顔。なぜ私がこの冊子をお借りしているかというと、新校舎がもうすぐ完成するからだ｡昨年度までは､｢教室､暗いなあ。壁が汚いなあ。体育館、また雨もりしたってよ。｣と、不満だらけだった私。だけど、200 メートル離れたところに新しい校舎が完成に近くなっているところを見ると、気持ちが沈んで、寂しくなって、泣きたくなった。この校舎、壊してしまうのか。みんなでおしゃべりをして、大きな声で笑い合った教室もなくなってしまうのか。窓から見える大きなイチョウの木。青々と葉をつけて、そっと風に揺れるのを見るのが私は好きなんだけど。薄暗い生徒会室。行事の前は執行部のみんなと頭を寄せ合って、｢あーでもない。こーでもない。｣と話し合った。歴代の行事のアイデアはあの薄暗くてゴミゴミした生徒会室から生まれたのだ。古くて穴だらけの体育館。学年レクをみんなでわーわーやった。楽しい思い出をつくった場所。そして､多くの卒業生が巣立っていった場所｡だから、この校舎が無くなってしまうのが切なくて、辛くて、一中の歴史を顧みてみようと勇気を出して、「さんたり学び舎」を借りに行った。ページをめくる。沿革史にはこうある。私の父も母も産まれていない昭和 41 年。立根中学校、盛中学校、猪川中学校が完全統合。昭和 42 年、落成式。そこから、理科室・放送室・給食設備・校門・プール・防球ネット・公衆電話などが増設されていった。当時の生徒達は新しい施設に驚きや喜びを隠せなかっただろう。昭和と平成の時代。特にも東日本大震災の大激流を経て、令和２年度、吉浜中・日頃市中、越喜来中と統合し、新しい一中がスタートした。一中を母校として巣立っていった卒業生は 10,866 人。私はため息が出た。この古い校舎はこんなにも大勢の生徒を見つめてきたのか。生徒が学んだり、感動したり、笑い合ったり。たくさんのたくさんの生徒の喜びや悲しみ、悔しさを見つめてきた。こぼれそうな笑顔を、流れる涙を受けとめてきた校舎。国宝や重要文化財ではないけれど素晴しい価値がある。ろうかも穴だらけ、壁には落書きを消した跡。ドアもギシギシ言うけれど、何人もの生徒を見つめ、見守ってきた校舎。数えきれない思い出と共に存在した校舎。校舎がささやいているようだ｡｢私はここにいた｡歌声や笑い声を聞いた。一緒に悲しんだこともある。全ての生徒を応援していた。幸せだった｡｣と｡そして、私は記念誌の中から卒業生のこんな寄稿を見つけた｡｢一生のうちで大事な時期を過ごした中学時代。今でも古ぼけた校舎を眺め、思い出に浸ることもあります。できることなら、もうしばらくの間、このままであってほしいと願います｡｣とある。ここでたくさんの生徒が大切な時間を生きてきた事を、私は決して忘れない。様々なものが新しいものに変わっていくけれど古いものが持つぬくもりや、そこに愛着を寄せる人々の心を見失うような事はしない。今、改めて校舎を見渡してみる。坊主頭の男の子がひょっこりと廊下の隅から顔を出すようだ。おかっぱ頭の女の子達がおしゃべりをしながら校門を入ってくるようだ。校歌の３番｡｢さんたり学び舎とこしえに｣とある｡卒業式には大きな声でこの校歌を体育館に響かせるつもりだ。

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私はこの作品を通して、多くの人に感謝をしながら前に進んでいく人生を作りあげたいと思います。これからの人生でも、本作品の校舎のように自分の頑張りを応援してくれたり、背中を前へと押してくれる人に出会うと思います。だから、この存在を当たり前だと思わずにきちんと感謝の気持ちを伝えながら前に進んでいきたいです。

入賞

全ての女性が明るく生きるために

滝沢市立滝沢第二中学校　3年
泉　澤　音　寧（いずみさわ　ねね）

女性の皆さん、一度はこんな疑問を抱いたことはありませんか。「なんで、女子ばっかり…」男性の皆さんにも聞いてほしい大事なお話があります。生理用品のことです。

ある日、私はテレビでこんなニュースを聞いてとても驚きました。生理用品が買えなくて困っている女性がいるということなのです。それは外国の話でしたが、貧困のために生理用品が買えず、学校や仕事に行けない女性がいるとのことでした。実は、私も普段から生理用品の購入について疑問に思っていることがありました。薬局等でこの商品を買うときどうして女性にだけ負担がかかるのだろうということです。よく考えてみると、男女平等を掲げているこの時代、女性ばかりに負担がかかるということはおかしいことなのです。男性の皆さん、生理用品はいくらすると思いますか。およそですが、生理用品は月に850円かかります。年間にすると 10,200 円もかかっていることになり、それが約40年も続くと考えると、408,000円もの費用がかかります。実際に経済的な理由で生理用品が買えない女性は、世界で3割ほどいるそうです。これが「生理の貧困」と言われ、社会問題となっています。近年アメリカやイギリス、スコットランドでは、この「生理の貧困」をなくすために生理用品の無償提供、非課税などのしくみがあるのだそうです。

気になっていろいろ調べてみたところ、日本でも同様に、生理用品が買えなくて困っている女性がいるそうです。日本では、生理用品に消費税が他のものと同じように 10 パーセントかかっています。私は、生理用品がぜいたく品と同じような扱いを受けていることが納得できません。なぜ女性にばかり負担がかかるのでしょうか。日本は先進国でありながら、先進国の中では男女の平等率が最下位のほうだそうです。日本は、他の先進国を見習って先進国としてあるべき姿を示すべきだと思います。もう生理のたびに苦しく、悲しい思いをする女性がいなくなることを願います。

そこで、私は、日本でも生理用品の無償化が広がるように提案したいです。日本でもこの活動を行っている団体はありますが、多くは民間のボランティア団体によるものです。もっと公的な機関が動いてほしいのです。たとえば、生理用品の費用を税金や医療の補助金など公的なお金で賄うことはできないのでしょうか。非課税にしても女性に負担がかかることには変わりありません。生理用品の無償化が「生理の貧困」を解決する糸口になると思います。

生理があるから人類は子どもを次の世代へ繋ぎ、長い歴史を築いてくることができたのです。子どもを残すことは、女性だけではできません。男性にも生理の時の女性のさまざまな負担を理解してほしいのです。女性だけが40年～50年近く体の負担や経済的な負担がかかるのはおかしいと思います。このような負担を減らすことが子どもをふやす事にも繋がるのではないでしょうか。

そして、このような現実を変えるためには、男性の生理への理解が必要だと思います。お互いを知り理解することで、互いに尊重し合う気持ちが生まれ、男女格差をなくす第一歩につながると思います。女性だけに負担がかからず、女性が苦しい思いをしない世界を実現するために、私は生理用品の無償化をさらに広げることを強く訴えたいです。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

母と、薬局に生理用品を買いに行った際に「今日は何か高いな」と母が言ったことがきっかけでした。それから、生理用品の購入について疑問に思い、調べてみたところ、生理用品を買う事ができずに困っている女性達がいることを知りました。私にとっては、生理用品の購入があたりまえだったのでとても驚きました。女性の負担を減らしてほしい、苦しい思いをする女性がいなくなってほしいと思って書きました。

入賞

命の価値

八幡平市立西根第一中学校　３年
伊　藤　華　穂（いとう　かほ）

命はとても大切だ
何年も何年も
月日がたってやっと
神様から与えられるものだ

この詩は宮越由貴奈さんの「命」という詩です。私の学校では、夏休み前に命についての学習をしています。しおりの表紙には、毎回この詩が載せられています。由貴奈さんは病気のため小学生で亡くなりました。私はこの詩を読むたび、命について考えます。

みなさんは、命とはどのようなものだと考えますか。なくてはならないもの。いつかは失われるもの。人によって感じ方は違っても、年齢も性別も国籍も関係なく、大きな価値をもつものだと思います。しかし、世の中では、親の虐待で子供が死んでしまったり、戦争で多くの命が失われたりしています。今年の７月には、安部元総理が銃撃されて亡くなりました。見ず知らずの人の命を簡単に奪う人もいる。「誰でもよかった」なんて許されるわけがない。なぜ、命は理不尽に失われていくのでしょうか。私は、こうしたニュースを聞くと心が苦しくなります。

私は将来、助産師になりたいと思っています。きっかけは、産婦人科を舞台にしたドラマを見たことでした。命の誕生、人の生まれる瞬間に立ち会うことに衝撃を受け、医療従事者の中でも命を取り上げられる助産師に憧れをもちました。「私もこうなりたい」とすぐに感じ、今私は看護科のある学校への進学を目指しています。看護体験をしたり、看護職の方の講話を聴いたりしていくうち、命についてより深く考えるようになり、患者さんやその家族の人たちの役に立ちたいと思うようになりました。この気持ち、夢を大切にしていきたいと思っています。

「命なんかいらない」と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる

由貴奈さんの詩はこう続きます。

命を奪われる人がいる一方で、自ら命を絶つ人がいます。すべてを投げ出したいと思う気持ちも分からなくはないけれど、命を粗末にするなんてあまりにももったいない。生きていればこれから先、いろいろな楽しいことがあるはず、多くの人と出会い、命の価値を見いだせるはずです。

命とは時間です。時間を大切にすれば得られるものがある。人生の中で、私たちは多くのものを得ていくのです。

私は助産師になってたくさんの命を取り上げたい。取り上げた後、その人が人生をまっとうし、いつか寿命を迎えるときまで､多くのものを得て、自分の信じる生き方をしてほしい。

誰もが当たり前に生きられるわけではない。望まずに失われる命がたくさんあるこの社会の中で、世界中の人たちが、命は誰にとっても価値があるものだと思ってくれることを私は信じたいです。そして、自分の命を、周りの人の命を大切にしてほしいと願っています。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、自ら命を投げ出す人や人の命を軽く見ている人たちにこの主張を届けたいです。命を無駄にする人に、少しでも命は尊く、大きな価値をもつものだと思ってほしいからです。また、私の大切な人にも届けたいです。普段、一緒にいるからこそその人の命の大切さに気づけないけれど、この主張を聞いて、自分や周りの人の命を大切にしてほしいと思います。

入賞

打って反省、打たれた感謝

矢巾町立矢巾北中学校　３年
阿　部　大　雅（あべ　たいが）

みなさんは今まで、全力で勝負に挑んだ経験はありますか？そして、その結果をどのように受け止めてきましたか？

私は、小学校２年生の頃から剣道を習い始め、６年生の頃には、チームで全国大会に出場しました。そして、中学校の部活動を引退した今でも、大好きな剣道を続けています。私が習っているチームの先生は、大会や練習が終わるといつも口癖のようにこんなことを話してくださいます。

「打って反省、打たれて感謝。」最初の頃は、この言葉の意味をあまり理解できず、ただただ練習に打ち込んでいました。２年生になって後輩もでき、地区中総体に向けて頑張ろうと思っている頃、私は自分で納得のいく動きができず、試合をしても負けが続き、悩んでいた時期がありました。その頃の私は、とにかく試合に勝つことだけにこだわって、がむしゃらに練習をしているだけだったのです。

そんなある日の練習で、先生からこんなお話がありました。「自分がなぜ相手から一本取ることができたのか考えてください。逆になぜ一本相手に取られたのか考えてください。一本取られた、ということは、相手が自分の弱いところを教えてくれたということだから、感謝の気持ちを持ってください。『打って反省、打たれて感謝』ですよ。」

私はそのときはっとしました。それまでの自分は勝つことだけにこだわって、なぜ負けたのか考えていませんでした。そして自分が一本取られたこと、負けたことが、自分の弱さを教えてくれることだなんて、考えもしませんでした。しかし、このときの先生の言葉で、剣道で一番大切な「相手に対する敬意、感謝、謙虚な気持ち」が自分には足りていなかったのではないか、と素直に反省することができたのです。

その日から私は、自分の試合の映像を見たり、積極的に先生や先輩にアドバイスをもらいに行ったりするなど、対戦相手はもちろんのこと、自分自身を研究するようになりました。そして、反省しながら自分の弱点を直せるように練習しました。そうなると、おもしろいように自分の調子も上がっていき、毎日手ごたえのある練習を続けることができるようになったのです。同時に上位の人と試合をし、なぜ負けたのか考え、それを練習に生かすことができるようになりました。

心も体もベストの状態で臨んだ新人大会では、一戦一戦しっかりと勝ち上がっていき、決勝では落ち着いて、自分の剣道に集中し、優勝することができました。さらに県大会では、格上の相手にも勝つことができて自己最高のベスト８という結果を収めることができました。その時、いままで頑張ってきてよかったな、剣道ってやっぱり楽しいなと思いました。

そしてふと、このことは、普段の生活にも重なることかもしれないと気づきました。良い結果が出たとき、それはなぜだったのか考える、また、思うようにいかないとき、そこにどんな問題があったのか振り返る。結果に一喜一憂するだけでは、その先の成長がないのではないか、と考えるようになったのです。失敗やうまくいかないことを誰かのせいにするのではなく、自分の足りないところを教えてもらったのだと理解することで、謙虚に自分を振り返り、その先に進んでいけるのではないかと考えるようになりました。そうすることで前向きに物事をとらえることができるようになったのです。

これからも、私に大切なことを教えてくれたこの言葉とともに、自分らしく歩んでいきたいと思っています。「打って反省、打たれて感謝」

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、尊敬する剣道の先生の言葉から、物事がなぜ上手くいったのか、また、うまくいかないときは、そこに何があったのかをよく考え、次に生かすことの重要性を学びました。剣道を通して学んだ感謝の気持ちや〝打って反省、打たれて感謝〟の言葉を忘れずにこれから、物事を前向きにとらえ、自分自身がもっと成長できるような人生を作り上げていきたいと思います。

入賞

感じる心を育てる

花巻市立宮野目中学校　３年
小野寺　凜（おのでら　りん）

差別とは偏った見方、思いこみなどの偏見が私達の目に見えるようになったものであり、私達の身近にある一つの問題です。この問題に対して私は「感じる心」が重要であると考えます。

「感じる心」これは誰もが持っている心ですが、一人ひとりの感じ方は全く違います。その人だけが持っている「感じる心」これは世界に一つのその人の個性であると言えるでしょう。

「感じる心」この心に気が付いたのは何気ない友人との会話の中でした。

霧の濃い日のこと、私は友人にその霧を
「暗くて不気味だね。」
と言いましたが、友人は
「白く薄暗いこの空間が幻想的で美しいね。」
と言いました。普通は不気味だと感じる、そう思い込んでいたので友人の話を聞いて驚いたのを覚えています。この時から私は友人の感じ方を気にするようになりました。

桜が散る時期、私は
「桜が散ってしまうのは、寂しいね。」
と言いましたが、友人は
「散った花びらが絨毯のようになるのが好きだなあ。」
と言いました。いつも友人の感じ方には心を打たれます。これが自分らしさなのだと思いました。誰もが持って生まれた「感じる心」、だけど自分にしか感じられないものがある、これは個性なのだと気が付いたのです。

私はふと思いました。「感じる心」を知ることがその人の個性、その人自身を知るということにつながっているのだとしたら、私は友人自身を見ることができていたのだろうかと。なぜ友人の感じ方を聞いたとき驚いたのか、それはきっと私が友人自身を見ることができておらず、勝手に「感じる心」を決め付けていたからだと思いました。相手を決め付け思い込む、これは無意識なものだったけれど、実は偏見の始まりなのかもしれない。

これまでの話を聞いて偏見に敏感になりすぎなのではないかと思った人もいるでしょう。ですが、「普通は…」とか「普通に考えて…」とか自分の「普通」を相手に押しつける、これもりっぱな偏見です。

改めて考えてみてください。みなさんは「感じる心」を見ることができていますか。無意識に偏見の目で見ていることはありませんか。無責任な噂で固められた外側だけ見てしまっているかもしれません。見て欲しいのです。だれもが持っている「感じる心」を、そうすれば自分のしていた無意識な偏見が差別になる前に気がつくことがきっとできます。

そもそも差別は偏見なくして生まれることではないのです。そして、その偏見は無知が原因で生まれています。無知と言ってもその人自身を知らないということであり、誰かから聞いた情報だけでは無知であることと一緒です。逆にそういう情報を知っているからその人自身を知ろうとしなくなる。だから、思い込んだままになってしまう。その人に関心を持たない、知ろうとしないことが差別につながっているのです。

「感じる心」これは私達の個性であり、偏見の溢れる世の中で見失いかけているものです。見つけてあげましょう。「感じる心」を、私達の体の中で「感じる心」だけが成長し続けることができます。なぜか。それは私達が絶えることなく多くの人と関わり続けていくからです。人と出会い、新たな「感じる心」を知る、その度に自分の「感じる心」は育っていきます。いろんな人の「感じる心」を受け入れ、認め合う度に育っていくのです。自分の「感じる心」を育てる、これが差別や偏見といった問題を乗りこえる第一歩になると信じています。

○　この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して、初めて自分がいつも思っていたことについて深く考え、追求し、自分なりの答えを見つけることができました。「感じる心」は成長していくので今、見つけた答えが違うものになるかもしれませんし、私と他の答えを持つ人がいるかもしれません。ですが、その時その時の、自分の感じたもの相手の感じたものを拒まず、受け入れ、学び続ける、成長し続ける、そんな人生を作り上げていきたいです。

入賞

多様性のある社会へ

北上市立上野中学校　３年
薮　﨑　千　奈（やぶざき　せんな）

「オタク」と聞いて、皆さんは、どんな人を思い浮かべますか。アイドルオタク、鉄道オタク、アニメオタク……。様々なジャンルでオタクと呼ばれる人がいますが、そのような人々に対して、必ずしも良い印象を持っているとは言えないのではないでしょうか。

私は、中学生になって美術部に入部し、そこで、オタクの友達がたくさんできました。それまで私は、「オタク」と呼ばれる人達と、正直距離を置きたいと思っていました。なぜなら、私のイメージする「オタク」は、根暗で、陰気で、少し変わった趣向を持つ人だったからです。

しかし、実際友達になってみると、オタクというのは、明るくて気さくな人たちばかりでした。むしろ、自分の好きなもの、つまり「推し」への愛や知識を極め、それを他人と共有することは、素晴らしいことだと思うようになりました。

私は何か好きなものがあっても、「周りはどう思うだろうか」と思い、今まであまり人に言いませんでした。そんな中、どんなことも包み隠さず、推しについて、友達と熱く語り合うオタクは、とてもまぶしく見えました。そして、無意識のうちに、オタクという言葉のイメージだけで、偏見を抱いていたことに気づかされました。

このような、自分自身が気づいていないものの見方や捉え方のゆがみ、偏りを「アンコンシャス・バイアス」というそうです。もし私がこの偏見に気づかなかったら、今も、そしてこれからも、オタクを避け続けたでしょう。

このアンコンシャス・バイアスの一番の問題点は、ものの見方や捉え方のゆがみを、自分自身で気づいていないという点です。昨年、政治家のある発言が問題となりました。「女性がたくさん入っている会議は時間がかかる」といった内容でした。確かに話の長い女性はいます。でも、話の長い男性だっています。「女らしく」「男らしく」などといった言葉を、皆さんも聞いたことがあるでしょう。私自身、性別について完全に平等と考えるのは無理があるのでは、と思っていました。アンコンシャス・バイアスの中でも、性差別は最も難しい問題だと言われています。生物学的に性差は存在します。しかし、ジェンダーレスの考えが重要視されている現在、男女の前に、一人一人の人間が存在していると考えるのが適切であり、その政治家は自分自身の偏った物の見方に気づいていないのだと思います。

その人がどのような人間なのかをありのままに判断する。「オタクだから」「女だから」「男だから」と、何かにくくろうとせず、まっさらな目で見る。たくさんの人が共に生きていくなかで、アンコンシャス・バイアスを完全になくすことは難しいことなのかもしれません。しかし、自分が無意識に持っている偏見が、社会の多様性を制限していないか、自分の世界を狭いものにしていないか、注意深く自分の考えや発言に耳を傾ける人々が増えれば、差別は確実に減っていくはずです。

「オタク」は、根暗で陰気で、人と変わった趣向を持っている人物……私と同じように考えていた人はいませんでしたか？私の家族は、テレビを見ながら「この人オタクっぽい」と、馬鹿にしたような口調で言うことがあります。自分の好きな物を、本気で追及することの、何が悪いのか。そもそも「オタクっぽさ」とは何なのか。

私たちが住むこの社会には、まだまだ、たくさんの差別や偏見が存在しています。悪意を持って人を差別することは言うまでもありませんが、アンコンシャス・バイアスも徐々になくしていくことが必要です。どんな価値観を持つ人たちも、自分らしく、生き生きと暮らせる社会がそこにはあるからです。

私は、人を軽率に判断せず、無意識の差別をしていないか慎重に我が身を振り返り、すべての人に平等に接することができる大人を目指し、生きていきます。

一人一人の個性が輝く未来を信じて―。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私の主張では、「無意識の差別」をテーマにしています。これは誰もが持っているものだと思うので、現代に生きる全ての人に思いを届けたいです。日常生活の中で、差別や偏見の含まれた考え・発言をしていないか、一度立ち止まってよく考えてみてはどうでしょうか。私も、この作文を書いて無意識の差別について慎重に考えるようになってから、沢山の間違いを自覚することができました。皆さんにも、当たり前だと思っていることとじっくり見つめ合ってほしいです。

入賞

映し鏡の新世界

一関市立磐井中学校　３年
石　川　莉々花（いしかわ　りりか）

「盲目的信者は黙っていろ。」

これは、私がSNSで顔も名前もわからない相手に浴びせられた言葉です。私の立場を「盲目的信者」と決めつけ、恫喝のような命令口調の「黙ってろ。」今まで味わったことのない、怒りさえも踏み潰す圧倒的な恐怖でした。

中学１年生の時、私はあるグループのファンになりました。そのグループはSNSを活動の母体としていて、そのコメント欄は、ファンによる温かい声援で満ちていました。自分と同じように、このグループを支持し、自分がうまく言葉にできない思いを、こんなにも素敵な言葉で表現してくれる仲間がいる。まるで楽園にたどり着けたような気分になりました。

けれども、そんな世界を分かち合えない人は少なからずいます。応援のコメントに混じり、「くだらない夢を見ている」と、挑発すようなアンチコメントをぶつけてくる人がいました。私はたまりかね、「頑張っている人を馬鹿にしないでください」とたしなめのコメントを書き込みました。その途端に食らったのが、「盲目的信者は黙ってろ」という返信でした。

当時の私は、立ち向かうにも受け流すにも免疫力が足りませんでした。誹謗中傷が厳罰化に向かう方向にある昨今、罪になる直前のギリギリの線を狙うような言葉は、例えるなら、柔らかい布に覆われながら、その下で見え隠れする刃物のようでした。私はしばらくの間、恐怖でSNSに近づくことができなくなりました。

そう聞くと、「そのままSNSから離れてしまえばいいのではないか。」「SNSはもともとそういう危険をはらむ世界だ。」「嫌ならば見なければ良いだけの話。」「自己責任だ。」という意見もあるでしょう。けれども、果たして「現実の世界とSNSの世界は別物」と断定して良いものでしょうか。

たまたまSNSという手段になっていますが、コミュニケーションの中で相手を傷つけていることには変わりません。現実のコミュニケーションの中でも嫌なことをいう人はいるし、言われれば傷つきます。

「SNSと現実は違う」とよく言われます。しかし、その言葉が独り歩きして、「どちらも生きている人間同士のコミュニケーションである」ことが、まるでかけ離れているような印象を持ってしまいがちです。昨今は特に、芸能人に対する誹謗中傷が問題視されていますが、それも、「本来は生身の人間同士のコミュニケーション」である感覚が麻痺していることが原因のように思います。

SNSでは人が変わったように言葉が荒くなる人がいます。「自分はSNSの世界と現実の世界をうまく使い分けている。」という気になっている人も多いと思います。けれども人間は器用にできていない、私はそう考えます。SNSの世界は別の世界ではない。映し鏡の世界。その世界を、温かい言葉で満たすことを心がける人は、現実で使う言葉も温かくなる。逆に、人を傷つける言葉を使う人は、うまく使い分けるつもりでいても、現実の世界で必ずほころびが出る。私はそのことを忘れないでいたいです。

これからを生きる私たちにとって、SNSの世界は避けるべき未知の世界ではなく、新しく広がったもう１つの自分の世界です。たとえ実生活とは違う自分を表現するとしても、根底にあるのは、生身の人間の世界であるという自覚と思いやりである、そのことを忘れずに言葉に表現できる自分自身であり続けたいです。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

現在　生活の中にインターネットやＳＮＳがいろいろな場所で使われています。小・中学生もそれらを使いこなさなければいけない社会です。その中で今、ネットやＳＮＳでの誹謗中傷が問題になっています。今回、自分がこの問題に直面し、その中で「今まで感じた事のない」何ともいけない様々な思いやＳＮＳの顔の見えない世界の怖さを感じました。改めてＳＮＳの使い方を一人一人考えてほしいと思った事がきっかけとなりました。

入賞

見えない境界線

遠野市立遠野東中学校　３年
小水内　華　稟（こみずない　かりん）

「自分の生命・仲間の生命を大切にし、一人一人が生き生きと活動すること」

「仲間とともに高め合い・支え合い一人一人の夢が拓かれることを目指す集団」

これは、私の中学校で大切にしている『スマイル宣言』つまり、『人権宣言』の前文である。

私が考える人権とは、誰しもが自分の考えや思いを伝えることができる社会であり、それを互いに尊重して明るい未来を作ることであると考える。不平等に人権を扱ってはならないと思う。

私が毎日生活している教室は、集団としては楽しそうに笑っている時が多い。仲がいいと思う。

しかし、目に見えない線が発生する時がある。私は、それを『境界線』と呼ぶ。様々なグループに分かれたり、一人でいたりする人がいる。一見それぞれが、楽しい空間を作り楽に生活をしているようにも見える。しかし、私には、特に一人でいる人は、孤独で心細い生活ぶりに見えることがある。

どうして、同じ教室で生活しているのに、『境界線』を作ってしまうのだろう。また、学校という限られた空間の中で数人が自分たちだけの世界を作っているとすれば、その周りの人は気を遣っていることもある。時には振り回され、言動を見て見ぬふりをすることもある。思いのままに生活をして、一方で我慢をしている人がいる。最初は、小さなひびでもそこから「集団の亀裂」や「個人への差別」へと繋がってしまうのではないかと思う。

もう一つの身近な一例を挙げてみたい。賑やかに生活している教室や集団のなかで、音一つなく静まりかえる瞬間を経験したことはないだろうか。意図的にみんなが存在感を消す。何かを決める時や役割を決める時におきる現象だ。中学校に入ってからこんな場面が増えているように思う。自分から物事を引き受けようとしない。誰かがしてくれるだろうとその場をやり過ごす。私は、そんな空気感が嫌だ。私は、手を挙げてその場を終わらせる。

そんな私も「黙っていれば終わる。私がしなくたって誰かがしてくれる」と思っていた時は確かにあった。

でも、今は違う。最初からうまく出来る自信などないが、みんなで協力していかなければいけないと考え方を切り替えた。全てにおいて最初から自信をもって生きている人はいないと思う。

つまり『見えない境界線』が私たちの決断や行動を邪魔しているのだと思う。多くの人が、意欲をもったり自信をもったりすることができないのではないかと思う。日々の生活の中にこそ、誰もが安心し生き生きと活動していくことが大切であると思う。

今は、学校という小さな社会にいる私たち、守られた社会で生活をしている。存在感を消したり境界線を引いたりしながらでも生きていけるのかもしれない。しかし、将来大きな社会へそして世界へ羽ばたいた時、そんな生き方で本当にいいのかと私は思う。

『みんな違ってみんないい』という言葉があるように、100 人いたら 100 人とも違う。だから、楽しくもあり、難しくもあると思う。

相手を受け入れることは言葉で言うほど簡単なことではないが、互いに高め合い・支え合い一人一人の夢が拓かれることを目指す生き方を私はしていきたい。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

今の時代、人と人との関わりをおろそかにしたり相手の人権を無視したりすることが、平然と社会の中だけでなく私の周りでも起きていると思います。私の学校では毎年、人権について学級で話し合い全校の前で、「スマイル宣言（学級の人権宣言）」をします。それは、『一人一人が生き生きと活動をし、全ての命を大切にするため』の宣言です。これからの社会を担う私たちだからこそ、真剣に考えて心に刻み、未来を切り拓いていかなければならないと思います。是非、多くの人々に届け、全ての人が尊重されるようにメッセージとして届けたいです。

入賞

野球少女からの提言

大槌町立吉里吉里学園　９年
木　下　望　愛（きのした　のあ）

私は、小学１年から９年間、野球に打ち込んできました。女子は私１人、男子に交じって練習してきました。

野球の魅力は、一球一球に全集中し、９人でカバーしあいながら勝利を目指して頑張るところにあります。

しかし、残念ながら、私たちの野球部は、部員がたったの３人でした。ですから、練習内容も限られ、けっして満足のいく部活動ではありませんでした。しかも、練習によるストレスから、イライラして喧嘩してしまうこともあり、本当にこの３人で楽しく練習ができるのか、不安になったこともありました。

そして、一番大変だったことは、大会に出る時、自分たちだけではチームが組めないことでした。野球は９人でするものなのに、たった３人ですから、当然、大会に参加する場合には、他の学校との合同チームということになりました。練習場所には、バスで移動して、限られた時間で練習しました。

私は、あんなに大好きだった野球を、苦しく思うようになりました。練習メニューがどんなに辛くても頑張れましたが、このような環境の中での練習では、楽しさより、やり切れない思いの方が強くなってしまったのです。

小学１年から夢中になって取り組んできた野球なのに、人数が少ないという理由だけで楽しめないのは、あまりにも理不尽な気がしてなりませんでした。

しかし、私はある新聞の記事で、このような状況の中で、部活動に取り組んでいる生徒が、他にもたくさんいることを知りました。

それは、「小中学生 10 年で 100 万人減」という記事を目にした時でした。それを読んで、岩手県は、全国で４番目の減少率であることを知りました。私の住む大槌町も、小中学校が７校から３校に減っていました。

こういった現状からも、全国的に生徒数が減り、部活動が満足のいくものにはならなくなってきていることが、はっきりと分かりました。部員数が足らずに、廃部にまで追い込まれたり、合同チームという形をとらざるをえなかったり…。

近年、好きなスポーツができなくなってしまっている生徒たちが、たくさんいることを私は知りました。だから、今私は、大好きな野球を９年間続けて来られたことを、前向きに考えてみようと思ったのです。

たった３人で、満足できる練習ではなかったにしても、冬のトレーニングで、３人で声をかけ合い、何度もダッシュで駆け上がった坂道や、試合で負けても励まし合ったバスの中や…。

いい思い出だってたくさんあったことに気がつきました。今までの９年間、いろいろなことがありましたが、私が野球をやめなかったのは、それだけ野球が好きだったし、そばにはいつも応援してくれた親や先生、私を同じように野球が好きな仲間たちがいたからでした。

私は、「スポーツは音楽に似ている」と最近思っています。音楽も大勢で歌う合唱もあれば、一人で歌うソロもあります。どちらも音楽であることに変わりはありません。どちらもそれぞれ楽しみ方があるのです。スポーツもそうです。人数が少なくても、考え方一つで、工夫一つで、楽しいものになるのです。不満を抱くよりも、そこに価値を見出し、ベストを尽くせば、きっと明るい道が拓けるはずだと、私は考えるようになりました。

これから生徒の人数がますます少なくなり、私たち３人のような状況で、練習をしなければならない人たちが増えていくと思います。でも、スポーツを楽しむ、苦しくても全力で挑戦する気持ちをもって、自分が好きなスポーツにこれからも、取り組んでいってほしいと、私は思います。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

全国的に児童生徒数が減少している今だからこそ、私は人数が少なくてもスポーツは楽しめるということを、スポーツを楽しみたい全ての人に伝えたいと思いました。人数が少なくて、練習するのが難しい状況の人たちに、この主張を届けたいです。

入賞

自分らしくない自分に

宮古市立第一中学校　３年
張　間　薫　梨（はりま　かおり）

自分らしさって何だろう。皆さんは「自分らしく生きれば幸せ」や「あなたはあなたのしたいように」という言葉を聞いたことありますか。「多様性」や「個性」の尊重が叫ばれる現代。テレビは個性的な人であふれ、個性の尊重の実現のために行動する人がいる中、私はいつも悩んでいました。自分らしさって何だろう。

小学生の時は多くの人が行く方向と違う行動のできる人に憧れました。流行りの持ち物や服装とは違うものを身に着ける自分。そうしていると、少しは私にも「真っ直ぐでぶれない自分らしさ」があるように思えました。

中学生になると、友達から、「薫梨って自分を持っているね。」と言われることが多くなりました。理由を尋ねると、学級での話し合いですぐに意見が言えるから。リーダーシップがあるから。それって私らしさなんだろうか。あんなにも憧れた、自分らしさを持っている人だと言ってもらえたのに、なぜか喜べない私がいました。学校では行事や会議で考えを求められたり、リーダーの役割を任せられたりすることが増えました。そういう自分が「私らしい」自分なのか。だからといってそうでない自分らしさを見つけることもできず、苦しいと感じることも増えました。

そんなある日の帰り道。剣道の稽古で何度やってもできないことを私と友人が先生に指摘され、友人は悔し涙を流していました。涙を流すことはもちろん、悔しい顔もしない私に友人は「薫梨はやっぱり自分らしさがあるよね。だから簡単に泣いたりしないんだね。」と言いました。違う。私の心は叫びました。本当の私は物事に対してはっきりとした考えを持っていない。そもそも興味を持てるものがない。物事を深く考えないから学級会ですぐに意見が言える。自分の考えがないから皆がどうしてほしいと思っているかを考えて発言できる。物事に興味がないから人からの指摘に涙を流すこともない。自分が探し、つくってきたはずの「自分らしさ」が誰かの求める、誰かからみた「自分らしさ」に変わり、それに縛られていることに気付きました。

そんなとき、あるタレントの言葉が私の心に留まりました。その人は、派手な服装、メイク、個性的な発言で私の印象に残っていました。「自分らしさ」を発揮しているように見えたその人は「何が自分らしいかはわかっていない。自分らしく生きていこうと思っていない。」と言い切るのです。そして、「生きていくうちに新しい自分に変わっていく。これぞ私というスタイルを貫くことは自分の可能性を狭くしてしまう。」その人は私のイメージにあったかつての個性的な姿ではなく、シンプルな服装で淡々と語っていました。その人の言葉に救われた気持ちになりました。「自分らしさ」はなくていいのか。同時に私自身も人を「その人らしさ」の中に閉じ込めて見ていたかもしれない。個性的な人を個性的であるという枠の中に閉じ込めていたかもしれないと思いました。友人に「あなたらしくないよ」と言ってしまったことがあったかもしれません。私は自分にも他人にも、「自分らしさはなくていい、自分を決めつけなくていい」と伝えたい。そう思いました。

今はまだ、興味を持てるものが見つからず、はっきりとした考えが持てない私ですが、こんな私だからこそ、自分らしさという枠に縛られず、どんなことにでもこれから挑戦できるのだと思います。今までは「私らしくない」と思われるかもしれない、と躊躇していました。でも周囲の友人や家族にもそんな自分を受け止めてほしい。同じように私も周囲の人のその人らしくない挑戦を応援できる人でありたいと思います。そして、「今こういうことをしている自分が好き」という思いに出会えたら、その気持ちに素直になって行動してみようと思います。「自分らしくない」たくさんの自分に出会えることを願って。

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を自分らしさを持っている人にも、持っていない人にも届けたいです。私と同じように自分らしさについて悩んでいる人がいると思います。この主張を通して皆さんが自分を決めつけず、素直な気持ちを大切にできたらいいなと思います。皆さんが自分らしくない自分に出会えることを願っています。

入賞

心の扉を開いて

野田村立野田中学校　３年
泉　川　夢　羽（いずみかわ　ゆめは）

皆さん、この花の名前をご存じですか。そうです、向日葵です。でもこれは、「はるかの向日葵」と呼ばれる特別な向日葵です。私は、太陽に向かってのびのびと、そして凛としている向日葵の花が大好きです。私は、この花を育てた「向日葵委員会」の初代委員長です。

私は、学区外の小学校から野田中学校に入学しました。小規模校で育ったためか、新しい環境では、人数の多さや考え方の違いに違和感を覚えました。変に委縮した私は、コミュニケーションは特定の人とだけして、自分の考えはあっても表には出さず、何事も皆に合わせるようになり、係やリーダーを決める時はいつも副の方で、一歩下がって過ごしていました。皆が自分を認めてくれるのか、自分についてきてくれるのかが不安で、自分の心の扉を固く閉じていたのです。

そんな時、事件が起きました。人づてに、自分が陰口を言われていることを知りました。さらに、私への中傷が書かれたメモが靴箱に入っていたのです。とてもショックでした。私はしばらくの間、その事実を誰にも打ち明けることができませんでした。またしても私は、心の扉に鍵をかけたのです。しかし、そんな私の変化に気づき、声をかけてくれた先輩がいました。両親は、出来事を見過ごさず、学校に伝えてくれました。先生方は、すぐに対応し、私の心をケアしてくれました。一緒に涙を流してくださった先生もいました。あの出来事によって、周囲の人が信じられなくなり、強い恐怖を感じたのも事実です。でも今は、それまでの自分が、周りに合わせてばかりいて、自分の想いを言葉にして伝えていなかったことが原因かもしれないと思っています。苦しく辛い経験で、忘れることはできないけれど、あの出来事で自分が変われたのも、また事実です。

最高学年になった今年、私は、自分の想いをみんなに伝えてみようと思い立ちました。野田中学校では、「想いを言葉に、言葉をカタチに」という姿勢で、様々な活動に取り組んでいます。これまでは、用務員さんや先生方が育てていた「はるかの向日葵」を、自分達で育ててみようと考えました。生徒総会で、復興や平和への想い、支援への感謝をカタチにしようと「向日葵委員会」を立ち上げ、種蒔きの参加者を募りました。10 人程度集まればいいかなと思っていたのですが、全校生徒の半数以上が参加してくれたのです。自分の想いに応えてくれる人がこんなにもいたのだと驚き、嬉しかったです。自分が周囲に認められたと実感できた瞬間でした。

以来私は、自信をもって皆の前で自分の考えや気持ちを言葉にし、言葉だけではうまく伝えられない時は、ポスターや通信を作り、納得のいくまで言葉を選び、構成や表現を工夫して伝えるようにしています。私が野田中学校で学んだことは、自分を大切にしてくれる人がいること。自分の想いを伝えれば、それに応えてくれる人も沢山いること、そして、苦しいことや辛いことがあっても前を向き、自分らしくいることの大切さです。でも、伝えようとしなければ、何も始まらないのです。皆さんは、心の扉を閉ざしてはいませんか？その扉の鍵は、自分自身が持っています。

○　この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、国語科の先生に私の主張に挑戦しようと誘われたからです。現在、社会集団の中で上手く周りとなじめずに悩んでいる人がいるかもしれません。そんな人に私の主張を届けて、自分らしく前を向いて歩いてほしいです。将来社会に出た時も、自分の心の扉を自分自身で開き、思いを言葉にして伝えて、自分らしく明るい人生を作り上げていきたいと感じました。

入賞

憧れの浄法寺太鼓

二戸市立浄法寺中学校　３年
野　崎　結　夢（のざき　ゆめ）

わあ！！すごい！これは、太鼓を打つ姿を初めて見た時の感想です。まだ、小学校に入学する前、当時の高校生が、地域のお祭りで演奏している姿に、幼いながら、圧倒された記憶が残っています。いつか私も、と思っていたものの、地域から高等学校がなくなり、浄法寺太鼓の打ち手も、いなくなってしまいました。

とても残念に思っていた幼少期から６年。小学校６年生の時に、嬉しい知らせを耳にしました。浄法寺中学校が、浄法寺太鼓を復活させるというニュースです。あの演奏を、また見ることができるんだ、と、とても嬉しく思いました。地域のお祭りで久々に見た時は、胸が躍りました。

中学に入学し、文化祭で見た太鼓演奏は、とても迫力のあるものでした。それぞれの曲で音の強弱や速さが違い、改めて太鼓のおもしろさに気付きました。そして、「先輩たちのように、カッコよく演奏したい！」と、強く思いました。

３年生になり、今年度、地区中文祭でのステージ発表が浄法寺中学校に割り当てられているということもあり、顧問の先生に、「浄法寺で有名な、漆をテーマにした曲を制作してみない？」と言われ、戸惑いましたが、挑戦してみることにしました。「素人が作曲？」と、不安でいっぱいでしたが、一日に少ししか取れない貴重な漆、地道な漆掻き作業、そして、長い年月をかけて完成する漆器の工程を想像しながら、曲作りに取り組みました。

「太鼓は叩くものではない、打つものだ。」

という指導者の教えのもと、リズム・速さ・強弱、どんなふうにしたら楽しんでもらえるのか、また、耳当たり良く、いつの時代でも受け入れてもらえる曲になるのか、部員間で意見を出し合い、なんとか形にしました。ほんの少しですが、先人の苦労が、分かった気がしました。

試行錯誤しながらやっと完成させた浄法寺太鼓の新曲「漆」初披露は、７月９日に行われた地区の七夕まつり。伝統曲３曲と計４曲。自分も含め、皆、緊張で胸が張り裂けそうになりながらも、地域の特産物でもあり、守り受け継いでいくべきものに込めた思いも伝えられるよう、リズムを合わせ、バチを持つ指先や視線も意識し、心を一つに演奏しました。

演奏後は、見てくださったたくさんの方々から盛大な拍手をいただきました。また、太鼓の指導者にも「たいしたもんだ。」とお褒めの言葉をいただきました。厳しい指導者からの言葉に、「やって良かった。伝統を継ぐことができて本当に良かった」と感無量でした。と同時に、地域に与える影響の大きさを感じ、とても嬉しく思いました。３年前に復活した浄法寺太鼓を、途絶えさせることなく、地域の方々に聞いていただけたことにも喜びを感じました。

伝統をなくすことは簡単です。しかし、残し、伝え、守り続けていくことは、容易なことではありません。これまで、たくさんの人が、たくさんの時間をかけて創り上げ、大切にしてきたものを、なくしてはいけません。地域の伝統、地域の宝を、私たち若い世代が、後世に残せるよう、そして、地域に元気を与えられるよう、伝統に誇りを持ち、伝え続けていきたいと思います。かつて、私が憧れた高校生のように、次は、私が憧れられる存在に！

○　この主張をどんな人に届けたいですか？

これまで『浄法寺太鼓』という伝統を今まで残し・伝え・守り続けてきてくださった師匠や当時の高校生の皆さんです。この主張と完成した新曲を聞いていただき、感謝の気持ちを伝えたいです。そして、これからは、自分たちが次世代へと受け継いでいくということも伝えたいです。

審査委員長講評

㈱岩手日報社論説委員会委員長　四戸　聡

審査委員会の講評をさせていただきます。

１７人の皆さん、お疲れさまでした。堂々として説得力があり、表現力も豊かな発表でした。練習の成果を十分に発揮することができたのではと思います。

審査委員の得点はきっ抗しており、いずれも遜色ない素晴らしい内容だったと思います。以下、審査の席で挙げられた主な意見を紹介します。

三上結楽さんは発表の際の表情が、とても生き生きとしていました。美容師に女子に間違えられた体験を通じてアンコンシャスバイアス（無意識の偏見）の存在に気づき、そこから個性を受け入れ、互いに認め合える世界の大切さに展開した論旨は明瞭で、高く評価されました。

菅原アンダーソンさんと併せてですが、等身大の表現に対する好感のほか、大勢の聴衆の前でも舞い上がることなく自分の考えをはっきりと伝えられていたことに、今日までの練習の蓄積が見られました。

県大会に出場する生徒さんたちは基本的に論旨がしっかりしていて、そこに大きな差はないようです。評価を分ける要因に聞く側が説得力を感じるかどうかがあります。落ち着いた態度で「人を理解するための知識や優しさの必要性」を訴えた菅原さんの発表は、この点で特に印象に残りました。

三浦萌さんはボーイスカウトでの渡航体験からゴミや食品ロスの問題に関心を持ち、ＪＲＣという具体的行動につなげている様子が、高い課題意識とともに丁寧に表現されていました。

全体的にジェンダーや多様性、ＳＤＧｓといった現代社会で注目される事柄をテーマにする発表が多かったと感じます。

一方で、自転車通学の際に偶然見つけたゴミを拾うかどうかの葛藤とか、地元の太鼓を継承する喜び、解体される校舎でのかけがえのない思い出など、普段の中学校生活から切り取った話題を柱に置いた主張は、情景が目に浮かぶようで、とても好感が持てました。

話しは戻りますが、ジェンダーの理解やＳＤＧｓの推進、思い込みで人を判断しない、個性を尊重するなどは今の世の中ではある意味、当然に尊重されるべき価値感と言えるでしょう。

ただ実社会に出てみると、決してそのように考える人たちばかりではありません。仮に頭で考えることはできても、その実践は難しいものです。

皆さんはこれからの人生でさまざまな人と出会いますが、今日訴えたような自分の考えを大切にしながら、押し付けることなく、自分の考え方と違う意見にも耳を傾けて、相手がどうしてそのように思うのか、分かり合える部分はないかなどを想像し、理解する努力をすることが大事です。

今日の発表を言葉だけに終わらせないことです。今後も発表に託した思いを心に留めて家族や友達、地域の人たちとの関係に生かしたり、社会のさまざまな問題と自分の生活を結びつけて考え、行動する姿勢を大切にしてほしいと思います。

今日の主張にはありませんでしたが、３年生は中学校入学と同時に新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、学校生活は相当な制約を受けたはずです。そうした３年間が自分にとってどんな時間で、そこから得たことだとか、親やきょうだいとの関わりだとか、もう少し当たり前にある日常を深掘りする発表を聞きたかった気がします。主張の裏付けにやや具体性を欠く内容が多いと感じたのは、この辺りが影響したのかもしれません。

今日は本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。

各地区大会の開催結果

（注）出場者欄　最＝最優秀賞　秀＝優秀賞　良＝優良賞

盛岡東地区　応募者数　850人

日　時　令和4年8月31日（水）13：00～16：30

場　所　盛岡東警察署

審査委員

㈱岩手日報社編集局次長兼報道部長	熊谷宏彰
盛岡教育事務所在学青少年指導員	小山田秀次
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	山口道明
盛岡東警察署刑事官	高橋裕隆
盛岡東地区防犯協会連合会長	鎌田まき子

出場者

最	1	身近に潜む「思いこみ」	北松園	3年	小林理乃
	2	花を咲かせるスマホケース	白百合	3年	吉田早希
会長賞	3	心の介護で幸福をつくる	岩大教育学部附属	3年	松原理桜
秀	4	私の小さくて大きな願い	下橋	3年	高橋朱那
	5	手話の可能性	巻堀	3年	髙橋みのり
良	6	過ちを繰り返さないために	下小路	3年	高橋舞
	7	三年間の成長日記	玉山	3年	川村悠吾
	8	ポジティブ―逆転の発想を	河南	3年	村井俊哉
	9	繋ぐ	見前南	3年	志和孝哉
	10	意識を変えて	上田	3年	菊地康生
	11	宿題の提出に向けて	城東	3年	三上佳那子
秀	12	今　ここから	仙北	3年	三浦萌
	13	人間関係を考える	黒石野	3年	菅野来樹
	14	届けよう　私の想い	乙部	3年	大森真優子
	15	差別と区別	見前	3年	尾崎柚果
良	16	教室で築く　信頼関係	大宮	3年	工藤璃乃
良	17	マイナスはプラス	松園	3年	荒井心々愛

盛岡西地区　応募者数　318人

日　時　令和4年8月30日（火）13：30～15:40

場　所　雫石町中央公民館

審査委員

㈱岩手日報社編集局次長兼報道部長	熊谷宏彰
盛岡市教育委員会教育研究所専門研究員	阿部真一
滝沢市教育委員会社会教育指導員	榊原世士
雫石町教育委員会社会教育指導員	下川恵司
盛岡西警察署長	吉野幸雄
盛岡西地区少年警察ボランティア協会副会長	阿部優
盛岡西地区防犯協会連合会副会長	根澤將藏

出場者

	1	引き継ぐ記憶	雫石	3年	吉田夢望
	2	一歩踏み出して	一本木	3年	角掛利唯
	3	動物と共に生きていく	厨川	3年	内田麻琴
	4	こんな未来は誰が望むのか	中央附属	3年	菅原明依
良	5	何気ない言葉で	柳沢	3年	岩崎柊奈
	6	声で魅せる力	滝沢	3年	湊詩姫
最	7	全ての女性が明るく生きるために	滝沢第二	3年	泉澤音寧
	8	三つの誓い	姥屋敷	3年	石倉穂夏
良	9	私と父	城西	3年	山下桐弥
秀	10	私を守る	北稜	3年	川又陽奈望
秀	11	全力少年・山崎力	滝沢南	3年	山崎力
良	12	わたしと補聴器、わたしとあなた	土淵	3年	佐々木結衣

北岩手地区　応募者数　116人

日　時　令和4年8月25日（木）13：30～16：00

場　所　葛巻町立葛巻中学校

審査委員

葛巻町教育委員会教育長	鹿崎良宏
岩手町教育委員会教育長	佐藤卓
八幡平市教育委員会教育長	星俊也
岩手警察署生活安全課長	太田可奈子
北岩手地区少年警察ボランティア協会理事	吉澤信光
㈱岩手日報社岩手支局長	齋藤大樹

出場者

秀	1	どうも、私が偽善者です	沼宮内	3年	渡辺昊太
秀	2	人生の案内人	安代	3年	遠藤梨音
良	3	今を幸せに生きるだけじゃない	小屋瀬	3年	南館杏
	4	普通	西根	3年	髙橋那央
良	5	一生の宝物	葛巻	3年	ﾃﾞﾝﾊﾞｰｳｯﾄﾞﾊﾂ
最	6	命の価値	西根第一	3年	伊藤華穂
	7	人と関わる、自分と向き合う	江刈	3年	栗村脩斗
良	8	心から笑える日が来ると信じて	松尾	3年	髙橋芙椛
	9	校則改革	一方井	3年	田中優翔

紫波地区　応募者数　127人

日　時　令和4年9月1日（木）13：30～15：40

場　所　矢巾町公民館

審査委員

紫波町教育委員会教育課長	大森啓睦
矢巾町教育委員会教育研究所長	小山田孝
盛岡教育事務所在学青少年指導員	畠山雅之
紫波警察署長	板澤裕之

出場者

良	1	「ありがとう」の言葉にのせて	矢巾北	3年	髙橋瑠祈愛
	2	「チャレンジで広がる未来」	紫波第二	3年	柳沢明日香
良	3	向き合う	紫波第一	3年	中川明咲

秀	4	コミュニケーション	紫波第三	3年	細川百合菜
	5	大切なものを守るために	矢　巾	3年	竹花和奏
最	6	打って反省、打たれて感謝	矢巾北	3年	阿部大雅

花巻地区　応募者数　258人

日　時　令和4年8月30日（火）14：00～16：20

場　所　県立生涯学習推進センター

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	齊藤義宏
花巻市校長会長	菅野広紀
花巻警察署長	及川　聰
花巻市青少年育成市民会議会長	鎌田幸也
花巻市教育委員会スクールソーシャルワーカー	髙橋啓悦
㈱岩手日報社花巻支局長	山本直樹

出場者

	1	今の私たちに	花巻北	3年	北川愛菜
良	2	伝統と未来	東　和	3年	菅野大斗
良	3	共感の世界を生きる	花　巻	3年	皆川陸仁
	4	自分らしく	矢　沢	3年	金森弘真
	5	私の挑戦	南　城	3年	紺野裕希
	6	ネバーギブアップ	湯　本	3年	藤原壮輔
良	7	無くしたい、無くならない	大　迫	3年	髙橋杏奈
秀	8	ありのままの自分とともに	石鳥谷	3年	佐々木賢治
	9	つながり	花巻北	3年	沼田登志也
最	10	感じる心を育てる	宮野目	3年	小野寺　凜
秀	11	本当の声	西　南	3年	藤原麗葉
	12	自信の種	湯　口	3年	久保田紗良

北上地区　応募者数　427人

日　時　令和4年9月6日（火）13：30～15：30

場　所　ブランニュー北上

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	多田克巳
北上警察署長	岩渕克彦
㈱岩手日報社北上支局長	板垣大助
和賀地区校長会和賀東小学校長	千田裕子
北上市社会教育委員	髙橋悦子

出場者

	1	「思いやりの手」を差し伸べて	東　陵	1年	昆野莉奈
最	2	多様性のある社会へ	上　野	3年	薮﨑千奈
	3	始めることが明日を変える	北上北	3年	秋篠幸来
	4	傷つけ合わないために	和賀西	3年	徳増志音
	5	深澤晟雄の言葉を道しるべとして	沢　内	3年	久保未侑
	6	誰のために勉強するのか	飯　豊	3年	及川讃香
秀	7	「思いやりであふれる世界を作る為に」	湯　田	3年	髙橋明日音
	8	３％の確率	北　上	3年	阿部心逢
良	9	笑顔でいられる社会への第一歩	南	3年	千葉彩花
良	10	９月1日に思うこと	江釣子	3年	千葉愛依
	11	自分	和賀東	3年	伊藤　花

奥州地区　応募者数　391人

日　時　令和4年8月31日（水）13：40～16：00

場　所　金ケ崎町立金ケ崎中学校

審査委員

㈱胆江日日新聞社編集局長	小野寺和人
㈱岩手日報社報道部第二部長	浅沼祐一
県南教育事務所在学青少年指導員	久保田　淳
奥州地区少年警察ボランティア協会長	今野　誠
奥州警察署長	板垣則彦

出場者

良	1	こどもの未来	金ケ崎	2年	ズリアアリアン
良	2	「壁」を無くして	水　沢	3年	小野寺絢香
	3	自分の道を走る	江刺第一	3年	菅原　怜
良	4	平和の追求、例えば…？	衣　川	3年	藤原有那
最	5	目をそらさずに	胆　沢	3年	伊藤千雛
秀	6	人の心に寄り添う	前　沢	3年	小野寺夏希
	7	Freedom or liberty	金ケ崎	3年	髙橋日菜
	8	差別のない未来をつくるために	東水沢	3年	佐藤隼太
	9	「言葉」の重み	水沢南	3年	佐藤明彩

一関地区　応募者数　116人

日　時　令和4年8月23日（火）14：00～16：30

場　所　一関文化センター

審査委員

県南教育事務所教育相談員	皆川　啓
一関警察署長	上野太郎
一関市教育委員会教育研究所教育相談員	小山祐二
平泉町教育委員会教育委員	三浦英子
㈱岩手日報社一関支社長	千葉　恵

出場者

	1	一人じゃない	舞　川	3年	袖野美咲
	2	目線を上げて	萩　荘	3年	冨塚晴良
	3	貧困なんてなくならない	平　泉	3年	鈴木瑠梨
	4	信頼と協力	花　泉	3年	岩渕宇紘
良	5	「当たり前」にありがとう	桜　町	3年	阿部凪紗
良	6	一歩を踏み出す勇気	一関東	3年	佐藤杏菜
	7	言うか言わないかの境目	一関一高附属	3年	千葉恭獅
最	8	映し鏡の新世界	磐　井	3年	石川莉々花
	9	この町に生まれて	厳　美	3年	千葉綾乃
秀	10	「ひと声」の勇気	一　関	3年	細川愛音

一関東地区　応募者数　204人

日　時　令和4年8月25日（木）13：30～15：10

場　所　川崎市民センター

審査委員

県南教育事務所在学青少年指導員	加藤　清
千厩警察署長	古里正博
一関市教育委員会教育研究所教育相談員	及川輝美
㈱岩手日報社一関支社長兼論説委員	千葉　恵
㈱岩手日日新聞社編集局次長	伊藤正幸

出場者

	1	見方を変えて	川　崎	3年 千葉　葵
	2	母がのこしてくれたもの	室　根	3年 小山菜月
最	3	自分らしさ	東　山	3年 菅原アンダーソン
	4	大原で育った私	大　原	3年 早坂祐亜
	5	SDGsの達成に向けて私たちができること	千　厩	3年 小野寺羽那
良	6	私が登校した理由	興　田	3年 佐藤奈津実
	7	人と関わるうえで大切にしたいこと	藤　沢	3年 菊池陽加里
秀	8	不平等な命の現実	大　東	3年 南山陽紅

気仙地区　応募者数　177人

日　時　令和4年8月24日（水）13：30～16：00

場　所　大船渡市立末崎中学校

審査委員

沿岸南部教育事務所在学青少年指導員	菅野　稔
気仙地区防犯協会連合会副会長	安田由紀男
大船渡警察署長	永澤幸雄
㈱東海新報社社長	鈴木英里
㈱岩手日報社大船渡支局長	村上俊介

出場者

	1	まず知ることから	大船渡	3年 熊谷優人
良	2	すべては自分から	高田東	3年 佐々木すみれ
秀	3	本当の笑顔になるために	世田米	3年 齋藤真彩
	4	高齢化社会で全て人が笑顔を絶やさない為に	高田第一	3年 山根心愛
最	5	さんたり学び舎	第　一	3年 小西真央
	6	今日は何を話そう？	末　崎	3年 村上千佳
良	7	近いからこそ大切に	東　朋	3年 金野愛華
	8	僕達に試されるもの	有　住	3年 畑中琉真

遠野地区　応募者数　82人

日　時　令和4年8月29日（月）13：00～15：30

場　所　遠野市立遠野東中学校

審査委員

中部教育事務所在学青少年指導員	齊藤義宏
遠野市教育委員会学校教育課長	佐々木淳一
遠野市校長会青笹小学校長	鈴木久美子
遠野市少年委員協議会副会長	菊池タキ
㈱岩手日報社遠野支局長	菊池宗矩
遠野警察署長	足利信弘

出場者

良	1	負けるもんか	遠野東	2年 菊池璃子
良	2	言葉の力	遠野西	2年 佐々木心愛
良	3	チャレンジの末につかんだもの	遠　野	2年 高橋俊平
良	4	夢	遠　野	1年 牧田奈桜
良	5	勇気ある一言	遠野西	3年 木戸口音羽
秀	6	ナイスチャレンジ	遠野東	3年 佐々木悠貴
秀	7	視点を変えることの大切さ	遠　野	3年 鳥屋部琉愛
最	8	見えない境界線	遠野東	3年 小水内華稟

釜石地区　応募者数　61人

日　時　令和4年8月26日（金）14：00～16：00

場　所　釜石市民ホールTETTO

審査委員

釜石市教育委員会教育長	髙橋　勝
大槌町教育委員会学務課長	吉田　智
釜石警察署長	前川　剛
㈱岩手日報社釜石支局長	遠藤　享

出場者

	1	スマホに支配されない生活を	唐　丹	3年 留畑史花
	2	「言葉」の力	大槌学園	9年 八幡天馬
秀	3	「好き」の形を認め合える社会へ	釜　石	3年 菊池圭悟
良	4	未来を変える第一歩	大　平	3年 佐々木梨音
	5	推しがくれた勇気	釜石東	3年 小澤空泉
最	6	野球少女からの提言	吉里吉里学園	9年 木下望愛
	7	心の鬼	甲　子	3年 佐野美尋

宮古地区　応募者数　164人

日　時　令和4年8月30日（火）13：30～16：20

場　所　シートピアなあど

審査委員

宮古警察署長	髙橋　淳
宮古教育事務所在学青少年指導員	佐藤和男
宮古市教育委員会教育研究所長	青笹光一
山田町教育委員会教育研究所長	倉澤和広
㈱岩手日報社整理部第二部長	菊池拓朗

出場者

	1	私は私らしく	崎　山	3年 佐々木詠美
秀	2	今の私たちが伝えること	田老第一	2年 花輪駿弥
良	3	悩めるあなたへ	新　里	3年 若林蒼陽
	4	夢を支える自分へ	第　二	3年 前川誠芽
秀	5	言葉の先には	河　南	3年 小笠原駿太
最	6	自分らしくない自分に	第　一	3年 張間薫梨
	7	自分を好きになる	花　輪	3年 山内大誠

	8	思いから主張へ、そして行動（アクション）へ	津軽石	3年	三河亜聡
	9	海と希望	重　茂	3年	山崎さくら
良	10	「あの日」を忘れない	山　田	3年	道股　結
良	11	本ト（本と・ホント）の想像力	川　井	3年	日野圓志朗
	12	楽しんで生きる	宮古西	3年	藤原萌衣

下閉伊北地区　応募者数　76人

日　時　令和4年8月31日（水）13：00～15：00

場　所　田野畑村アズビィ楽習センター

審査委員

県立岩泉高等学校長	藤田知彦
㈱岩手日報社宮古支局長	金野訓子
岩泉町教育委員会教育長	三上　潤
田野畑村教育委員会教育長	相模貞一
岩泉警察署長	三島木達也

出場者

	1	岩泉の誇り	小　本	3年	伊藤凪人
	2	川の大切さと人の関係	小　本	3年	三浦一希
良	3	拝啓、気づきをくれた人へ	小　川	3年	竹花広大
	4	未来に向かって	小　川	2年	後藤優心
秀	5	民謡とともに	岩　泉	3年	平石真唯
	6	新たな一歩	岩　泉	2年	佐々木一眞
	7	何にだって、なれる！	田野畑	3年	畠中　尚
最	8	色を纏うように	田野畑	2年	三上結楽

久慈地区　応募者数　291人

日　時　令和4年9月5日（月）13：30～16：00

場　所　久慈市文化会館アンバーホール

審査委員

久慈市教育委員会教育長	後　忠美
久慈警察署長	加藤秀昭
久慈地区中学校文化連盟	千田博之
㈱岩手日報社久慈支局記者	高橋　康
久慈地区少年警察ボランティア協会長	濵久保優司
県北教育事務所在学青少年指導員	新毛公生

出場者

	1	言葉が持つ意味	種　市	3年	梅澤華恋
	2	挑戦	中　野	3年	長根優杏
良	3	他人の言葉で拡がる世界	侍　浜	3年	篠山桐花
	4	人への見方	三　崎	3年	村塚一心
良	5	欅との約束	山　形	3年	西　颯志
	6	新しい自分へ	夏　井	3年	下野輝翔
秀	7	嘘のない自分を掴む	宇　部	3年	坂本優真
最	8	心の扉を開いて	野　田	3年	泉川夢羽
秀	9	命を守り抜く未来を	普　代	3年	金子　葵
	10	自分に足りないことは何か	大　野	3年	曲戸夏帆
良	11	自信	久　慈	3年	橋本知歩
	12	ネットに支配されたくない	大川目	3年	髙谷奈々緒
	13	発信しよう	長　内	3年	四作椛乃

二戸地区　応募者数　103人

日　時　令和4年9月2日（金）13：30～15：30

場　所　一戸町立奥中山中学校

審査委員

県北教育事務所在学青少年指導員	新毛公生
一戸町教育委員会教育長	中嶋　敦
二戸地区中学校文化連盟会長	佐々木由貴子
二戸警察署長	千葉孝喜
二戸地区少年警察ボランティア協会長	田畑文弥
㈱岩手日報社二戸支局長	猪越雅哉

出場者

秀	1	差別のない世界へ	福　岡	3年	林　永遠
	2	僕たちの創る未来	金田一	3年	高田　心
最	3	憧れの浄法寺太鼓	浄法寺	3年	野崎結夢
良	4	唯一無二の輝きを	軽　米	3年	大崎杏奈
	5	国際交流とは	九　戸	3年	松田侑莉朱
	6	普通なんて存在しない	一　戸	3年	内村　凜
良	7	私にできること	奥中山	3年	倉口心羽

令和４年度（第24回）「わたしの主張岩手県大会」 審 査 要 領

1　審査基準

(1)　採点の基準

各審査委員の持ち点は、発表者１人につき、次の区分による 100 点とし、採点は減点法とする。

ア　論　旨　　55 点
イ　表　現　　30 点　　計 100 点
ウ　態　度　　15 点

エ　時　間　　主張時間は５分とする。

※　主張時間が４分 30 秒未満の場合又は５分 30 秒を超える場合は、それぞれの時間から 10 秒を過不足するごとに１点を減点する。

※　発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとする。

(2)　採点の内容

ア　論　旨：①　若者（中学生）らしい感性で、新鮮な主張であるか。
②　個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
③　自己の目標を実践する意欲や、提言に関する熱意・真剣さが感じられるか。
④　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

イ　表　現：①　熱意と説得力があり、聴衆に感銘を与えたか。
②　言葉や発声は明瞭で、抑揚・間の取り方も適切であったか。

ウ　態　度：　（聴衆をよく見て）落ち着いた態度であったか。

エ　時　間：・主張開始後５分　……　ベルを１回
・主張開始後５分 30 秒 ……　ベルを２回

2　審査方法

(1)　審査表の記入

各審査委員は、各発表者の審査結果を、審査採点票（個票）及び審査採点票（控）に記入する。

(2)　順位の決定

各発表者の主張終了後、審査会において最優秀賞１人、優秀賞２人、優良賞３人を選考する。

受賞者の決定は、採点集計表を参考とし、審査委員の協議によるものとする。

なお、最優秀賞受賞者は、「少年の主張全国大会」候補者として、北海道・東北ブロック審査会に推薦するものとする。

3　成績発表並びに講評

審査委員長が結果を発表し、講評を行う。

※各地区大会の審査要領は、岩手県大会審査要領に準じるものとする。

令和４年度（第 24 回）「わたしの主張岩手県大会」実施要綱

1　目　的

次代を担う中学生が、未来に向けての夢、社会に対しての意見や希望、日常生活の中で感じたこと（意見・発見・提案・疑問）など、自分の気持ちを素直に表現する弁論の場を提供することにより、地域社会との関わり（つながり）について考え、行動する契機にするとともに、参加中学生の文化的な資質向上に寄与し、大人を含めた多くの人が、中学生に対する認識、理解を深めることにより、少年の健全育成の充実を期そうとするもの。

2　対　象

県下に在住している中学生及びこれに相応する学籍又は年齢にある方

3　主　催

わたしの主張岩手県大会実行委員会

【　岩手県　岩手県教育委員会　岩手県警察本部　（公社）岩手県青少年育成県民会議
（公社）岩手県防犯協会連合会　（株）岩手日報社　岩手県中学校文化連盟　】

独立行政法人 国立青少年教育振興機構

4　共　催

盛岡市　盛岡市教育委員会

5　後　援

岩手県中学校長会　岩手県ＰＴＡ連合会　ＮＨＫ盛岡放送局　ＩＢＣ岩手放送　テレビ岩手
エフエム岩手　めんこいテレビ　岩手朝日テレビ

6　開催日時

令和４年９月 14 日（水）　12 時 45 分～16 時 15 分

7　開催場所

いわて県民情報交流センター（アイーナ）７階　小田島組☆ほ～る（盛岡市盛岡駅西通１丁目 7-1）

8　開催方法

無聴衆での開催としますが、新型コロナウイルス感染拡大の状況によっては、会場には参集せず作文・映像による審査会とする場合もあります。（「別記」参照）

9　出場者

別に定める推薦要領に基づき、地区大会において推薦された 17 名による主張発表を行います。

10　発表内容

(1)　主張の内容

以下の内容を参考として、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどを率直に表現してください。未発表・自作のものに限ります。

分類	内　　容	これまでの例(参考)
A	・ 社会や世界に向けての意見 ・ 未来への希望や提案　等	・ 環境問題、国際社会について ・ 地域の伝統文化・伝統芸能 ・ 貧しい国への支援 ・ 介護の問題 ・ 夢に向かって　等
B	・ 家庭、学校生活、社会（地域社会）との関わり ・ 身の回りや友達との関わり　等	・ 命の尊さ ・ 共に生きる(障がいと向き合う) ・ 家族愛 ・ 人との関わり ・ 復興への思い　等
C	・ 安全で安心な生活ができる地域社会づくり ・ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動 ・ 大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言　等	・ 犯罪のない明るい地域社会づくり ・ 交通事故を防止するには ・ いじめのない社会生活 ・ 公共のマナーや規則を守ること ・ インターネットやスマートフォンの危険、正しい利用方法 ・ 報道されている事件や事故の防止　等

※　複数の分類に関わることも想定されます。重複可能です。

※　商業的な固有名詞の使用は、極力避けるようにしてください。
（悪い例：○○県にある○○旅館　良い例：○○県にある旅館　など。）

(2)　発表方法

自由（日本語で発表することが条件）

※　発表の際はマイクを使用します。

※　発表に際しては、パフォーマンス（例えば、服装は自由とし、小道具を使用してもよい。）を取り入れてもよいこととします。ただし、発表者以外の動作・補助等は認めません。

※　発表者の礼は、発表前後の２回とします。（礼は審査対象とはなりません）

(3)　発表時間

５分間（400 字詰め原稿用紙４枚程度）

※　発表時間は、読み始め（パフォーマンス含む）から読み終わり（パフォーマンス含む）までとします。

※　発表時間が４分 30 秒未満の場合、又は５分 30 秒を超える場合は、採点の際に１点減点となりますので、ご注意ください。（さらに 10 秒ずつ過不足するごとに１点ずつ減点）

【発表時間による減点】

時間	4′ 10～4′ 19	4′ 20～4′ 29	4′ 30～5′ 30	5′ 31～5′ 40	5′ 41～5′ 50
減点	2	1	0	1	2

11　表　彰

発表終了後、直ちに開催する審査会において、最優秀賞１名、優秀賞２名、優良賞３名を選考し、表彰します。

なお、最優秀賞受賞者は、北海道・東北ブロック審査会に「少年の主張全国大会」の候補者として推薦します。

12　自然災害等への対応

(1)　自然災害等による大会中止

大会中止の判断基準は、以下のとおりとします。

①　自然災害等により、欠席者が３分の１を超える見込みの場合（７名以上が参加できない場合）

②　会場及び会場周辺の被災等により、当日の大会開催が困難な場合

(2)　大会中止時の対応について

①　当日８：30 分前に中止と判断した場合は、直ちに参加者等へ連絡します。

※　当日８：30 以降は、原則として参加可能者のみで大会を実施し、最優秀賞受賞者を東北・北海道ブロック大会へ推薦します。

※　当日８：30 以降であっても、12(1)②と判断される場合には、大会を中止し、直ちに参加者等へ連絡します。

②　大会中止の場合も、12(1)②の場合を除き、会場に集合可能な審査員に集合していただき、作文・映像審査により最優秀賞を決定します。

(3)　新型コロナウイルス感染拡大に伴うリスクへの対応

感染拡大や学校行事等の状況を考慮しながら、開催の有無や開催の方法等について実行委員会で随時協議し、各地区実行委員会に連絡します。（「別記」参照）

13　その他

(1)　提出された原稿・映像データは返却しません。また、岩手県大会に参加した作品の出版権・放映権は、大会主催者に帰属します。映像データは、個人情報が含まれるため大会終了後に大会主催者が消去又は廃棄いたします。

(2)　岩手県大会出場者及び引率者（１名）の旅費は主催者が負担します。県大会出場者には、出場決定後改めて案内を送付します。

14　問合せ先

【主に実施要綱や地区大会の結果取りまとめ等に関する事】

わたしの主張岩手県大会実行委員会事務局
〒020-8570　盛岡市内丸10-1　岩手県環境生活部若者女性協働推進室内
TEL　019-629-5337
FAX　019-629-5354

【主に県大会出場者や県大会の運営に関する事】

公益社団法人　岩手県青少年育成県民会議
〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通1丁目7-1　アイーナ6階
TEL　019-681-9077
FAX　019-681-9078

【主に地区大会の運営・予算に関する事】

公益社団法人　岩手県防犯協会連合会
〒020-0881　盛岡市天神町11-1　岩手県交通安全会館
TEL　019-653-4448
FAX　019-653-4488

わたしの主張岩手県大会の期日・会場及び最優秀賞受賞者

備考欄（全国大会出場）：※1　青少年育成国民会議会長奨励賞受賞、※2　文部科学大臣奨励賞受賞
※3　審査委員会委員長賞受賞、※4　国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

回	年度	開催期日	会　　場	最優秀賞受賞者			
				学校名・学年	氏名	発　表　題	備考
1	11	11.9.24	盛岡市立飯岡中学校	一関市立厳美中学校　3年	佐藤　遥	苦悩の日々を乗り越えて	
2	12	12.9.21	矢巾町 田園ホール	花巻市立南城中学校　2年	小野寺　静	日本と中国のかけ橋に	
3	13	13.9.19	玉山村 姫神ホール	釜石市立甲子中学校　3年	八幡　茜	海外語学学習で学んだ心	※1
4	14	14.9.19	雫石町 野菊ホール	久慈市立久慈中学校　3年	高安　愛美	風に吹かれて	※1
5	15	15.9.19	岩手県立大学講堂	東山町立東山中学校　3年	高橋　志帆	老いも誇り	
6	16	16.9.27	花巻市文化会館	北上市立南中学校　3年	菅原　周平	噺の言葉と言葉の話	※2
7	17	17.10.4	盛岡市 都南文化会館	盛岡市立上田中学校　3年	坂本　潤奈	私は地球人	※2
8	18	18.9.20	盛岡市 アイーナホール	遠野市立上郷中学校　2年	奥寺　大輔	とらわれない心で	
9	19	19.9.26	滝沢村 チャグチャグホール	普代村立普代中学校　3年	内野沢　さつき	おじいちゃんからの伝言	
10	20	20.9.24	紫波町立紫波第二中学校	八幡平市立松尾中学校　3年	藤原　寛	「吃音」の壁を越えて	※1
11	21	21.9.24	盛岡市 盛岡劇場	盛岡市立上田中学校　3年	西郷　華菜	伝えていく責任	※4
12	22	22.9.24	花巻市立石鳥谷中学校	盛岡市立見前中学校　3年	因幡　百合絵	どうせ枯れる花ならば	
13	23	23.9.22	滝沢村立滝沢南中学校	陸前高田市立気仙中学校　3年	小笠原　和恵	高らかに　響け	※3
14	24	24.9.20	盛岡市 盛岡劇場	遠野市立小友中学校　2年	菊池　愛利子	「命」をいただく仕事	
15	25	25.9.19	矢巾町 田園ホール	山田町立山田中学校　3年	中村　奈緒	「当たり前」の中に生きる	※4
16	26	26.9.18	雫石町 野菊ホール	岩手大学教育学部附属中学校　3年	渡邉　美卯	一言の重さ	※4
17	27	27.9.11	盛岡市 キャラホール	西和賀町立沢内中学校　3年	佐々木　瑠海	支えられている命だから	
18	28	28.9.15	盛岡市 小田島組☆ほ～る	北上市立南中学校　3年	石川　杏奈	強く　優しく　未来を見つめて	
19	29	29.9.14	滝沢市 ビッグルーフ滝沢	奥州市立東水沢中学校　3年	小野寺　悠来	得意なことを数えよう	※4
20	30	30.9.14	矢巾町田園ホール	岩手県立一関第一高等学校附属中学校　3年	小野寺　千里	挑戦し続ける勇気	※4
21	R1	R1.9.18	盛岡市 小田島組☆ほ～る	宮古市立第一中学校　3年	小笠原　凜	自由にはばたける社会へ	
22	R2	R2.9.16	滝沢市 ビッグルーフ滝沢	盛岡市立下橋中学校　3年	鈴木　凜	生き続ける	
23	R3	R3.9.15	岩手県庁会議室	滝沢市立柳沢中学校　3年	髙橋　美花	挨拶	

（参考）

「第 44 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2022～」入賞作品

【内閣総理大臣賞】

山梨県代表

前橋　真子（まえばし　まこ）さん　　北杜市立甲陵中学校　3 年

発表テーマ　：　あなたの声、心に届け

【文部科学大臣賞】

長崎県代表

赤川　明信（あかがわ　あきのぶ）さん　　大村市立玖島中学校　3 年

発表テーマ　：日本を耕す

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

栃木県代表

阿久津　結花（あくつ　ゆうか）さん　　大田原市親園中学校　3 年

発表テーマ　：私が育てる「結（ゆい）」

【審査委員会委員長賞】

宮城県代表　浅野　友希さん　塩竈市立玉川中学校　3 年

発表テーマ：私のスタートライン

滋賀県代表　田島　桂さん　米原市立米原中学校　3 年

発表テーマ：水餃子

1　「第 44 回少年の主張全国大会～わたしの主張 2022～」（WEB 開催）について

(1)　主　　催：独立行政法人国立青少年教育振興機構（後援　内閣府、文部科学省ほか）

(2)　開催期間：令和 4 年 11 月 1 日（火）～11 月 30 日（水）

※審査結果は 11 月 13 日（日）に掲載されました。

(3)　開催場所：少年の主張全国大会 WEB 開催特設ページ

（方法）　全国大会出場者（12 名）の主張発表動画を掲載

11 月 13 日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載

※全国大会に選出されなかった作品については作文が掲載されました。

(4)　参 加 者：各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名

※　岩手県大会最優秀賞受賞者の田野畑村立田野畑中学校 2 年　三上結楽さんが努力賞を受賞しました。

2　入賞作品を印刷物等に転載する場合は、国立青少年教育振興機構（教育事業部事業課事業係 TEL03-6407-7726）から許可を受けてください。

【内閣総理大臣賞】

あなたの声、心に届け

山梨県　北杜市立甲陵中学校　３年　前橋　真子

「真子ちゃん、きょうだいいるの？」「妹と弟がいるよ。」「妹かぁ。羨ましい。」羨ましいなんて……。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳を付けている。発音も上手ではない。私が小学生のとき「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさを覚えた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのも辛くなった。

この春中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶよう言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら？」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、あまり目立たない。みんなと変わらない見た目でいられる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたいの。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは私自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌だったことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもその度に努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな妹の努力を一番近くで見て知っているのは私だ。障がい者というフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か手伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけてほしい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉だ。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとしてほしい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気にいりのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越しではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。

【文部科学大臣賞】

日本を耕す

長崎県　大村市立玖島中学校　３年　赤川　明信

僕の夢は「日本の未来を明るくすること」です。僕は幼稚園の頃から日本地図や歴史のマンガを読むのが好きでした。2000年以上続く歴史、多様な風土と文化、美味しい和食、大好きな長崎くんちなどなど日本の素晴らしさを知って「日本ってすごいなぁ」と思うようになりました。小学校高学年になるとニュースにも関心を持ち始め、少子高齢化、過疎化といった大きな問題に日本が直面していることも知りました。僕はそんな日本の持つ大きな課題をどうにか解決したい、僕にはなにができるだろうと考えるようになりました。その答えは僕の家の中にあったのです。

僕の父は消防署で働きながら、家業である農業にもはげんでいます。いわゆる兼業農家です。お米、はっさく、夏はなすびやきゅうり、冬は大根やはくさい、神棚に飾る榊までたくさんの種類の作物を作っています。そんな家に生まれた僕は、田畑の野焼きや農薬の散布、田植えなど休みの日はよく駆り出されます。手伝っていて感じるのは多くの作業に「キツイ」、「汚い」、「危険」の農業の３Ｋがあてはまることです。束になった藁や30キロある米袋を担いで数十メートル先まで運んだり、田植えの時は足は焦げ茶色に染まり、時には顔まで泥まみれです。また、チェーンソーや草刈り機。油断して使ってしまうと命に関わる事故にもつながります。

これを考えれば、農業をしたいという若者が減っているのも納得してしまいます。僕は忙しい父からの「苗ば植えんばけんが、外に来い」といった言葉に聞こえないふりをすることもよくありました。僕はそれほど農業の手伝いをするのが嫌でした。

ところがある日、野菜の種を植えた数日後畑に水をやりにいくと「すげぇ」１つだけかわいい小さな芽が出ていました。これが、たったの２ヶ月で自分のふくらはぎよりも太くて、食べるとほんのり甘い立派な大根になるのです。植物の生命力は本当にすごいものです。そして、作物はその種や苗を植えて、手入れをする人がいなければ、成長することはできません。農業では作物を数ヶ月で「立派な大人」に育て上げ、いわば植物の「親」になることができるのです。

それ以来僕はよく植えた野菜をじっと見つめるようになりました。

「この前、植えた大豆がこんなに大きくなっている。」

見ていると本当に心が落ち着き、勉強の気分転換にもなります。僕はペットを飼ってないし、アニメやアイドルの「推し」もいません。そんな僕にとっては作物こそが自分を癒してくれるペットや推しに代わるような存在であり息子であり、１つの大切な命なのです。

また、僕はもう１つ気付いたことがあります。世間では３Ｋと思われているような仕事でも、農家のように感動や喜びを得たり、多くの人から感謝を受けて誇れる仕事なのではないかということです。だから父もツラくても、忙しくても仕事を続けられるのでしょう。

この２つのことに気付いてから僕の農業に対する考え方は大きく変わりました。そして、「日本の未来を明るくする」ということについて改めて考えました。

今、コロナ禍によってリモートワークが増えたり、副業が解禁されたり、多様な働き方が増えてきています。また、日本の食料自給率は2020年度カロリーベースで37％です。これは外国と比べても、低い水準で農家の高齢化や若者離れで更に下がるかもしれません。耕作放棄地も増えています。我が家でも祖父がなくなってからは広い土地を父一人で管理しています。雑草は３ヶ月で伸び、落ち葉や枯れ木が落ちるので手入れは本当に大変で、限界だと思います。このような現状を踏まえ、僕は農業の新たな形への改革が必要だと考えます。ＩＣＴやＡＩ、自動運転といった日本の誇る科学技術を用いて、農家の負担を減らして、他のことにもチャレンジができる「新しい農家の働き方」です。

僕はこれまで「絶対に将来農業には関わらない」「この田舎から解放されるまであと５年もあるのか」と思っていました。でも、農業の素晴らしさを知った今では、農業に関わり続けたいという思いが強くなっています。農業の感動、おもしろさを伝えていくことで、若者がワクワクしながら畑も日本の未来も耕していくそんな「未来」になるのではないでしょうか。「新しい農家の働き方」それこそが「日本の未来を明るくすること」の第一歩だと信じて。

【国立青少年教育振興機構理事長賞】

私が育てる「結（ゆい）」

栃木県　大田原市立親園中学校　３年　阿久津　結花

お米は、私をたくさんの人と結んでくれます。私の父と祖父は、お米の食味を競う国際大会で最高賞にあたる金賞を受賞しています。ギネス世界記録に認定された「世界最高米」の原料にも選ばれ、日本中からお米の注文が殺到しています。気がつけば、私の夢は世界で一番美味しいお米を栽培することになっていました。

米作りの知識や技術は、もちろん父と祖父から教わりました。苗を強くするための苗踏みや、田植え機やコンバインの運転の仕方。見ていると簡単そうに見えても、自分でやってみるととても難しいのです。背丈が低く根は白く長い稲の方が台風や病気に強いなど、知れば知るほど面白くなっていきました。

小学６年生のとき、小さい田んぼを父から貰いました。お米は原種に近いほうが美味しいと知り、ササニシキの親にあたり、原種に近い「ササシグレ」をそこで作りたいと思いました。父の知り合いで会津でササシグレを栽培している人から種を分けてもらえることになり、私の「ササシグレ」作りはスタートしました。苗作りからこだわり、無農薬、無肥料、自然栽培で育てています。毎朝学校へ行く前に除草をしています。作り始めたあとで、「ササシグレ」は血糖値の上昇が穏やかで、米アレルギーの人も症状が発症しにくい、体に優しいお米であるということも知り、一層思い入れが強くなりました。私の「ササシグレ」は年々食味値が上がり、美味しくなっていると感じています。

みなさんは、農業に「つらい」「汚い」というイメージをもっていませんか。実際に農業に触れてみたら、農業の楽しさがわかるはずです。私の田んぼは手植えなので、人数が必要です。去年は私と父と友達１人の３人でしたが、今年はさらに増え、３人の友達が田植えを手伝ってくれました。素足で田んぼに入ることを躊躇していた友達も、終わった頃には「楽しかった」「来年も手伝うよ」と言ってくれました。

こんな風に心を込めて育てた私の「ササシグレ」は、今、自然食品を扱うお店で販売しています。販売することが決まったとき、私はパッケージをデザインしました。無農薬、無肥料、自然栽培のイメージをシンプルなデザインで表現しました。このお米が人と人を結ぶことを想像し、稲が輪を描くようにイラストを書きました。そして、「結」と名付けました。

「新米のように美味しい」「また買います」店頭に並んだ私のお米を買ってくださった方からのメールが届きます。会ったこともない人が私のお米を食べて、「美味しい」と言ってくれる。こんなにも嬉しいなんて。本当にお米が人と人とを結んでくれました。生産者が販売者を通して消費者と繋がれるとき、たくさんの人が幸せになれると知りました。もっともっとこの喜びや幸せを広げたい、そう思いました。

私のお米は、地域の食材を使った料理をキッチンカーで提供している方とも結んでくれました。前回のイベントで好評だったので、次も声をかけてくれそうです。

今、私にはやりたいことがたくさんあります。自分のお米を使った料理を提供するキッチンカーやレストラン。米粉のお菓子の販売もしたい。農作業の体験を通して子どもたちに農業の楽しさを広めたい。いろいろな企画はＳＮＳで発信して、たくさんの人と繋がり、人と人を結びたい。

私を取り巻くこれらの繋がりを作ってくれた父に、繋がりを広げるコツを聞いてみました。「何かを決めると、物事とは動き出すんだよ。小さな一歩を踏み出すことで世界は広がっていく。」と話してくれました。

私も一歩を踏み出します。これからは、自分の考えていること、取り組んでいることを、自分でどんどん発信します。私は、田んぼを照らす太陽のような笑顔と、相手にエネルギーをもたらす魅力的な人になって、人と人を結んでいきます。そこで出会えた人との「結」を大切にし、笑顔になる人を増やすために。

第 24 回わたしの主張岩手県大会発表文集

令和 4 年 12 月発行
編集　公益社団法人岩手県青少年育成県民会議
〒020-0045　盛岡市盛岡駅西通 1 丁目 7 － 1
いわて県民情報交流センター（アイーナ）6 階
電話：019-681-9077　FAX：019-681-9078
ホームページ：http://www.ipayd.server-shared.com/

※　転載等の問い合わせは、上記へご連絡ください。